



TITLE:

范氏義莊の變遷

AUTHOR(S):

近藤, 秀樹

CITATION:

近藤, 秀樹. 范氏義莊の變遷. 東洋史研究 1963, 21(4): 461-506

ISSUE DATE:

1963-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152622>

RIGHT:

范氏義莊の變遷

近 藤 秀 樹

序 論

范氏義莊についての研究は、日知錄卷六庶民安故財用足に顧炎武が附した短かい註に着眼された田中萃一郎氏がその概要・意義を紹介・賞揚されたのを嚆矢とし、やがて現に東大東洋文化研究所に藏され、本稿もまた史料の多くをそれに求めた乾隆十一年重修・范氏家乘（以下家乘）と略稱）を牧野異氏が紹介せられた。^①清水盛光氏はこの家乘が傳える范氏義莊の性格を主軸に据えて廣く宋代以後の族產（義莊・祭田）の起源・分布・運營を分析されたのち、族產の性格を「宗族の持つ公共の財産である。しかしそれは族人の寄附または遺産の酌留によって作られ、族の共同占有にもとづく原始社會の民族的共有物の如きものではなかった」と

され、その機能を「∴族產は、族結合を本として作られながら、それ自身族結合を作りゆくものであるといふことが出来る。」と結論された。^②その後仁井田陞氏は范氏義莊を倣行した義莊・義田をいわゆる『共同體』として考えられるに際して、その性格を「氏族共同體の遺制ではなく、」より積極的に、「農村における共同體關係の稀薄さのただ中に成立し」てきた「農民の利益をまもる公的權威の缺如した當時の社會における農民の私的保障機構である」とされ、氏が中世初期とされる一〇、一一世紀にこの同族集團が再出發する當初から支配團體としての一面をもっていたことを指摘され、その私的保障機構と支配團體としての二面性を統括されて、結局それは「大地主制の支柱であり、同族的利己主義を貫きつつ封建秩序の安定化のための作用をも

ち、大地主にとって農民利用の手段であり、私的保證機構としての協同組織は、農民再生産のためにはまた有力な足場となっていた。」ものとして機能したと述べられている。^④

筆者はかつて同族的土地所有に私的保證機構としての一面をみる、この仁井田氏の見解に疑問を表明し、宋代以後の土地所有は中世的ないわゆる「共同体」の枠を破砕した地主・佃戸關係を基軸に据えるべきではないかと愚見を述べたことがあった。^⑤しかし、同族的土地所有が宋代以後において事實として繼起的に存在しつづけ、とりわけ時代がくだり近代にはいつてその設置・分布がむしろ流行し、現代において革命的前衛によって農民的土地所有に基礎を置くところの新權力の樹立が構想されるに際して、打倒さるべき舊權力の一つとして宗族の權力が指摘されねばならなかったほどに宗族的結合が、それとしてあった以上、宗族的土地所有は依然として解明さるべき對象たるの資格を失うものではない。筆者が土地問題へ接近する最初の試みとして、以上の諸先學および最近の Twitchett 氏の業績^⑥に導かれながら再び范氏義莊をとりあげるのは、同族的土地所有の先驅・模範として多くの倣行者をうんだ范氏義莊の

増減の契機を時代とともに逐いながら、宗族的土地所有を推進した要因、阻止した要因を明かにし、そこから如上の傾向を推進した歴史的原因を問うてみたいからにはかならない。

第一章 北宋時代の范氏義莊

范仲淹（989—1062）、字は希文、文正はその諡。唐の載初元年（690）に懷州河内（現河南省）より出身し宰相に至った范履冰の裔孫という。唐末に幽州良鄉縣主簿・四世祖范隋が亂を兩浙に避けてより蘇州吳縣の人となった。曾祖范夢齡、祖父范贊、父范墉と代々吳越の錢氏に仕え、宋初、錢俶の宋政權への歸順に従つて一家をあげて華北に移った。仲淹は墉の第三子、遷北の直後二歳にして父の死に遇う。

母謝氏は貧に責められ依るべき親戚故舊なく山東淄州長山の朱氏に再嫁し、仲淹も朱説と名づけられた。1015年（眞宗・大中祥符八年）二七歳で進士合格、廣德軍司理參軍に選任されて母を迎え、さらに亳州節度推官に至り奏して范姓に復した。その後、内に呂夷簡一派の專横、外に西夏の興起という仁宗の慶暦年間（1041—1048）に處し、韓琦

・富弼・歐陽脩らとともにいわゆる正學派として新士風の形成に力があつたこと、先憂後樂の箴言に示めされるように徳治主義を標榜する近世官僚の典型として自らも行動したことなどは周知のところであるが、またその創置した義莊によって著名であつた。

義莊の創置 仲淹と同郷同時代人の錢公輔が創置の直後1059年（仁宗・嘉祐四年）に誌す義田記^⑦によるに、

范文正公蘇人也。平生好施與。擇其親而貧、疏而賢者。咸施之。方貴顯時。於其里中。買負郭常稔之田千畝。號曰義田。以養濟羣族。

とあり、平生逆境にある者を援助することを好んだ仲淹が、族人扶養のために負郭常稔の田十頃を買って義田と名づけた、これが范氏義莊の創置である。義田を創案した仲淹は、その動機を、

吾吳中宗族甚衆。於吾固有親疎。然以吾祖宗視之。則均是子孫。固無親疎也。吾安得不恤其飢寒哉。且自祖宗來。積德百餘年。始發於吾。得至大官。若貴富而不恤宗族。何顏以入家廟。

と述べたと伝えられる。^⑧ところで錢公輔の義田記によるに義田設置は仲淹にとって二〇年來の宿願であつたといふこ

とであるが、それが具體化したのは彼が1069年（仁宗・皇祐元年）正月に知杭州に任じられてからであつた。仲淹より四歳上の兄仲温は仲淹の薦により仕官、當時すでに蘇州に致仕隠退していたが、仲淹自身の書いた彼の墓誌銘に、^⑨

皇祐初。某來守錢塘。與府君（范仲温）議置上田十頃於里中。以歲給宗族。

とあり、義田設置は杭州にいる仲淹と蘇州にいる仲温との間で協議してすすめられた。この頃仲淹が仲温にあてた書簡に、

某拜聞中舍三哥。急足還。領書。承尊候已安。…今送米三石。酒十紵去。每事寬心。在此公田不損。盡將置義田。請選好者典買取。更託陳六一哥用心。此事難成而易循。切切屯田言。須是開春。請更相度相度。

とある。公田はいふまでもなく職田のこと。さきに仲淹は官僚に廉潔を期待するならば職田は廢罷すべからざること^⑩を論じたが、この書簡からうかがうと仲淹はその職田からの収入をもって義田典買の資本としたようである。さらに同じく仲温にあてた書簡^⑪においては、

某再拜。人回領書。知尊候萬福。…所置田如何。若置得一莊。

須是高田。則久遠易爲照管。若在木濱側近。則只典買田段。亦得影堂。……

と、田を買うには高田を選び將來の管理・運営に便をはかるように指示している。こうして范氏義田は仲淹自から「蘇常湖秀。膏腴數千里。國之倉庾也」と認めた長江デルタ地帯でもとくに上等の田を集めて置かれたのであった。

仲淹初定規矩 1050年（仁宗・皇祐二年）、仲淹は義米の支給方法を規矩一三條に定めた。それが文正公初定規矩である^④。それによるに、男女とも五歳以上の族人は各房に置かれた請米曆に登録され、毎月末ごとに掌管人のもとに出向き、掌管人の帖簿と照合して一日あたり各人白米一升（糙米のばあいは一斗を白米八升に折算）、月にして一人三斗を受領する。また冬衣として絹一疋（十歳以下五歳以上は各半疋）を支給されるほか、嫁娶・喪葬にはその尊長卑幼に順じて二貫から三〇貫に至る現錢を支給する。この歳一〇月より義米・冬衣の支給を開始する。次年からは豐熟の秋には二年分の糧を倉儲し、凶荒の歳といえども逐月の義米支給はつづける。ただし餘儲のないときにはまず冬衣をついで嫁娶・喪葬の順でその支給を中止する。二年の蓄え

をなお餘す糧儲があつても糶貸することは許されず、順次新米に買い換えて倉儲しておくこと。以上が初定規矩の主たる内容である。

前引の錢公輔・義田記は發足直後の義田の様子を傳えて次のようにいう。

擇族之長而賢者一人。主其計而時其出納焉。日食人米一升。歲衣人衣一縑。嫁女者錢五十千。娶婦者二十千。再嫁者三十千。再娶者十五千。葬者如再嫁之數。葬幼者十千。族之聚者九十口。歲入粳稻八百斛。以其所入給其所聚。需然有餘而無窮。

范氏は仲淹以後その直系の監簿（長子純佑）・忠宣（次子純仁）・右丞（第三子純禮）・侍郎（第四子純粹）の四房を中心に仲淹の同輩親・傍系親を含めて一六房に分かれた。當時の族人は九〇口。さきの規定により一人に支給すべき義米は一年で三石六斗。これを糙米每斗白米八升の率で換算しても四石五斗。これに九〇口を乗ずると四百五十石となる。一方、錢公輔は義田からの収入を粳稻八百斛と誌しているが、田中氏既引の呂惠卿の 1075年（神宗・熙寧八年）の上奏^⑤には、

臣等有田在蘇州。一貫錢典得一畝田。歲收米四五六斗。然常有拖欠。僅如兩歲一收。上田得米三斗。

とあり、當時の租米收入を一畝四く六斗とする。1030（眞宗・天聖八年）年の范仲淹自からの言によれば、

竊以中田一畝。取粟不過一斛。豐稔之秋。一斛所售不過三百錢。

とある。中田粟一斛は脱穀して約五六斗。呂惠卿の數字と符合する。以上の數字に比べて義田千畝八百斛、一畝八斗の數は少々多いが、負廓常稔の高田を選んで義田が置かれたことを考えるならば、決して不自然な數字ではない。従って粳稻八百斛という數字は脱穀後の租米收入であろう。⑩とすれば義米支給總數四百五十石は義田にとつては易々たるものであり、規矩のいう二年分の倉儲もさして困難事ではなく、仲淹初定の規矩に郷里の外姻親戚すなわち母妻系の族人にして貧窮なる者にも、諸房の協議によって義米を支給して濟助すべきを規定しているが、總じて錢公輔の「霽然有餘而無窮。」という餘裕ある經營であつたと考えられる。

規矩の續定と義田の増廣 仲淹は義莊發足後二年で歿した。彼には純佑（1024—1074）・純仁（1027—1101）・純禮（1031—1106）・純粹（1032—1101）の四子があり、そ

れぞれ仲淹の恩蔭で仕宦し、純佑は將作監主簿、純禮は尚書右丞、純粹は戸部侍郎に至つた。そして痼疾のあつた純佑を除いてそれぞれ義莊規矩の續定・修定に參劃しているが、とりわけ密接な關係をもつたのは次子純仁であつた。

純仁、字は堯夫、忠宣はその諡である。1049（皇祐元）年進士合格。父の存命中は命あつても赴任せず、その歿後も兄に仕え、屢々の推薦を固辭し、その間長兄に代つて族人を治めて異議なからしめた。仕宦して後尚書右僕射兼中書侍郎に至り、父子二代にわたる進士合格、宰相を出すという榮譽を擔つた。

純仁が義莊に關して行つた第一着手は、1064（英宗・治平元）年に朝廷に請うて仲淹所定の規矩に皇帝の公認を得たことである。その理由は左の如くである。

知開封府襄邑縣范純仁奏。切念臣父仲淹先任資政殿學士日。於蘇州吳長兩縣。置田十餘頃。…謂之義莊。見於諸房撰擇子弟一名管勾。亦逐旋立定規矩。令諸房遵守。今諸房子弟有不遵規矩之人。州縣既無勅條。本家難爲申理。五七年間。漸至廢壞。遂使飢寒無依。伏望朝廷特降指揮。下蘇州。應係諸房子弟有違犯規矩之人。許令官司受理。伏候勅旨。右奉聖旨。宜令蘇州依所奏施行。割付蘇州准此。治平元年四月十一日。⑪

すなわち、義莊は發足後わずかに一〇年餘、はやくも諸房の子弟にして規矩に違反する者によって廢壞の危機に遭遇していたわけである。

仲淹は在世中に、兄仲溫にあてた書簡^④で、

…互相戒約。勿煩州縣。如輒興詞訟。必奏乞深行。請三哥（仲溫）指揮。兒姪知委。

と書き送り、族人が官邊の手を借りるような事態を戒めているが、一方ではある族人を長洲縣尉に奏薦して義莊の管理にあてている。すなわち後世「掌義莊之祖」とされた范純誠（仲淹再從兄鈞の子）について純仁の墓誌銘は、

君九歲而孤。事太夫人孫氏。居于河南偃師縣。…及長。才性通敏。勤於文史。（仲淹）奏補太廟齋郎。…皇祐二年。文正公置義田于蘇州。以贍族人。因謂君曰。非汝莫辦吾事。乃奏以爲長洲縣尉。俾立規法。以貽永久。…

と誌す。仲淹初定の規矩は、あるいはこの純誠によって草されたものかもしれない。ともかく發足當初の義莊は純誠を通じて長洲縣尉という公的權威の許で運営されたことは疑いない。しかし、その數年後の嘉祐初年（1061）に純誠は衡州に遷任してしまった。これから以後純仁の上奏に

いたるまで、仲淹の創置した新しい試みは、早くも族人の違犯行爲によって危機に瀕したのである。純仁は規矩違犯の族人を官邊の手によって處斷することで義莊の維持をはかったわけである。

勅旨による公認を得た後も、義莊運営にたいする新しい障害を経験するごとに新規矩が續定された^⑤。そのうち重要なものを立規の順を逐って述べよう。

1073（神宗・熙寧六）年、純仁續定三項には、族人で郷試に赴く者に初回十貫文、次回減半の現錢を支給すること、族内より教授を選んで束脩糙米五石を毎月支給し、族人子弟の教育にあたらせる——恐らくすでに義塾が設けられていたであろう——などの項を含む。いずれも、科舉應試を奨励する意に基くものである。

1083（神宗・元豐六）年、純仁續定の四項では、まず、
 掌管人侵欺。及諸位輒假貸義莊錢穀之類。並申官理斷償納。不得以月給米折納。

と規定し、掌管人の義莊錢穀の侵欺を禁止している。

ここに見える掌管人とは、錢公輔の義田記に、
 擇族之長而賢一人。主其（義莊）計而時其出給焉。

と見える者で、この時に設けられた規矩の別項で、

掌管子弟。若年終當年諸位月給米不闕。支糙米二十石。而能支及半年以上無侵隱者。給一半己上。並令諸位保明後支。：

とあれば、當時この掌管人による義米の侵欺が相當なものであったことを窺わせる。糙米二十石の加給は掌管人に廉潔を求めるためであったことは疑いない。

この時の續定規矩でさらに注目すべき一項は、

族人不得租佃義田。詐立名字同。

の一項である。これから義田は族外人に租佃させていたことを知り得るが、同時に族人のうちには、その名字を詐つてまで義田を租佃する者がいたことも明らかである。この時に續定された別項で、

義莊勾當人催租米。不足。隨所欠分數。剋除請受。謂如欠米及一分請受。至納米足日全給。已剋數更有情弊者。申官決斷。不支。

とあるを見ると、義米支給の多寡は租米収入の多寡に密接に依存しており、さきの呂惠卿の上奏にあるように當時の租佃制が「常有拖欠。僅如兩歲一收。」と述べるが如きものであるとすれば、一方には義米の支給を待てずして義田を租佃する族人があり、かかる族人佃戸は租米を拖欠しがち

である、といった相關々係からこの規定となつたのであるう。

1095（哲宗・紹聖二）年二月、純仁續定の四項のうち、まず第一項は、

身不在平江府者。其米絹錢並勿給。

と規定し、義米の給付對象を義莊所在地の平江府に現住する族人に限定した。このことは平江府以外に移住していく族人がいたことを物語るが、その族人に毎月義米を支給することは事實上不便であつたからであろう。さらに1098（哲宗・元祐元）年に純仁・純禮・純粹が參定せしめた一〇項のうちに、

因出外住支月米者。其歸在初五日以前。取諸位保明。詣實。聽給當月米。

とある一項を參照すれば、當時平江府から轉出したり、再歸したりする族人がいたことが知れる。かかる族人としては、まず仕宦する族人とその家族が考えられよう。仲淹の初定規矩に、

子弟出官人。每還家待闕守選丁憂。或任川廣福建官留家鄉里者。並依諸房例。給米絹并吉凶錢數。雖近官。實有故留家者。亦依此例支給。

とすでに仕出の族人が待闕や丁憂で家に居る期間、あるいは當時家族を嚮往するを許されなかった川廣福建など邊地に赴任したり、そうでなくとも正當の理由があって、家族を郷里に残していくばあいには、その家族を義莊支給物の支給対象とすることを規定していた。これに該當しない出官族人の出郷は當然義米支給一時停止として取扱われたであろう。さらに1098（哲宗・元祐元）年に續定された規矩の別項では、

諸位子弟。官已陞朝。願不請米絹錢助。贍衆者聽。

と陞朝官族人の支給辭退を勧誘している。このように一般に出仕の族人は支給対象から除外されていく傾向にあった。この1095年の支給対象から除外された平江府以外居住の族人には、この仕出の族人を含んでいたであろうが、それ以外の族人にもかなり頻繁な出入があったらしい。これを具體例にもとめると、まず、仲淹は歿した翌年に河南府河南縣萬安山の功德褒賢禪院に葬られたが、純仁は、それに従って河南に家居したとみえ、忠宣公國史本傳には

文正葬河南。遂爲河南人。

とあり、のち劉克莊（1187—1269）の後村先生大全集卷九

二趙氏義學莊記には南宋の丞相趙葵（1186—1266）の言として、

文正家在潁昌。族在吳。吳田爲贍族設。家不預也。吾家與族皆居於潭。皆食於莊。非五千畝不可。

とあり、仲淹は潁昌（河南開封府許州）に家居し義莊とは無關係に家計を營んだといっている。恐らくこの仲淹・純仁家居の河南と平江府との間には族人の往來があったであろう。また、既引の范純誠の墓誌銘には、純誠が河南偃師縣に居ったことを述べているが、その歿後の一家について、

子三人。時尙幼。曰正倫・正辭・正邦。朱夫人護其喪北歸。守義訓子。

と誌す。朱氏は三人の幼兒とともに河南へ歸郷したのであるが、のち正倫は一六房中の朝請房の房祖として、正邦は司理房の房祖として家乗の世系に記載されている。牧野氏もいわれるように家乗の「世系中に含まれているのは蘇州在住の者のみに限り、他郷へ移住した者は省かれている」のであるから、正倫・正邦の兩人は再び河南から平江府に轉入してきたことに疑いない。このように范氏一族には河南と平江府とを往來する者があり、この支給対象を限定した一項は、かかる族人を対象に増定されたものと考えら

れる。

同じ1069年二月續定の別項は、義莊が族人の田土を典買することを禁じたもので、次のごとくいう。

義莊不得典買族人田土。

はじめ仲淹が置いた義田千畝が仲温に依頼して典買したものであったことは、既引の仲温あて書簡で明かである。また、同じ頃にやはり仲淹が典買の手續きについて仲温に指示したものと思われる書簡には次のようにいう。

某再拜中舍三哥。……莊契恐又出限。餘錢且據數稅却。自家置少義田。不可却令漏稅。所退絹已換得好者。今將去。聞夏稅倚閣。如戶等該得。即將絹賣來。納田契稅錢。如不該得。卽且納稅。田契確實。用多少錢。請細割取來。今令人去。候所印契便與了却。付去人來。……

右文の大意は次のごとくであらう。

莊契は恐らく（契稅を納むべき）期限をすぎているでありましょう。餘った錢で且らく（所定）數どおり納稅しておいてください。自家が少々の義田を買ったからとて、却って漏稅せしめてはなりません。退つてきた絹はすでに好い絹に換えて、今そちらにもつていかせようとしています。聞けば夏稅が倚閣されることになるのか。もし戸等が（倚閣對象の戸等に）該つたならば、この絹をば賣つて田契の稅錢を納めてください。もし該

らずとも、且らく納稅はしましょう。田契の實を確かめて、いかばかりの錢がいるものか、どうぞ詳細にお申越しく下さい。今人をいかせますから、印契の了却をまつて、この人にもたせてよこしてください。……

右文から、典買された義田は典賣者との間に莊契を立てて取引されたこと。その莊契は所定の契稅を納入して官司の印を得るのが正常な手續きとされたこと。仲淹は（ある族人の葬式を負擔した）餘錢かあるいは（夏稅に納入するための）絹を賣却するかして契稅の資にあてようと考えていたこと、などを知りうる。ところで典買とは、いうまでもなく典賣者の收贖を前提している。のち1106（徽宗・崇寧五）年に純粹によつて、

義莊遇有人贖田。其價錢不得支費。限當月內。以元錢典買田土。輒將他用。勒掌管人償納。

の一項が規矩に加えられたのは、典賣者が義田を收贖した際に、その月内に、戻つてきた元錢でさらに義田を典買し、義田の規模縮減を防止せしめている規定と解しえよう。すなわち義田は一定の資本をもつて繼續的に典買する田土が、典賣者によつて收贖されるまでの期間の收益をもつて運営されるものであった。その際に族人の田土を典買す

るを禁じたのは、後述するように、當時差役について官司の保護を加えられ、あるいは税の負擔率においてもすでに特權をえていたかと思われる義田にたいして、族人がその私有する田土を形式的に典買してこれら義田の恩典のみに均霑しようとする、いわゆる詭名寄産を禁じるために設けられたのであろう。

1098（哲宗・元符元）年には、純仁・純禮・純粹らの指揮により一〇項の規矩が參定されたが、ここに義宅と義倉とに關する規矩が初出する。まず義宅については、

義宅有疎漏。惟聽居者自修完。即拆移舍屋者禁之。違者。掌管人申官理斷。若義宅地內。自添修者聽之。本位實貧乏。無力修完。而屋舍疎漏。
實不可居者。聽諸位同相視。保明詣實。申文正位量支錢完補。即不得乞添舍屋。

とある。義宅について、南宋の樓鑰（1137—1213）の范氏復義宅記⁹には、

吳門范氏。自唐柱國麗水府君（范曄）居於靈芝坊。今在雍熙寺之後。五世孫文正公……訪求宗族。買田千畝。作義莊以贍之。……因廣其居。以爲義宅。聚族其中。義莊之收亦在焉。

と誌す。ところでこの義宅についての一項は義宅は原則として居住する族人が管理すること、宅地内であれば自力で添展^{つけひく}することは許すが、これを拆移すなわちとりこわして

（恐らくは宅地外に）移轉させてはならぬこと、を規定したものである。さらに 1115（徽宗・政和五）年に純粹が修定させた一項には、

族人不得以義宅舍屋私相兌賃質當。

とあり、義宅を族人が個人的に賃貸したり、入質したりすることを禁止している。思うに義宅は族人を居住させる無賃の舍屋であつて、この規定は族人が恐らくは族外の人に義宅を租屋として又貸したり、質入れすることを禁止したものであろう。

また、義倉については、

義倉內。族人不得占居會聚。非出納勿開。

とある。既引の樓鑰の文により、義倉も義宅と同地址に設けられたものであったことを知り得る。しかし、義米などを保管する義倉を「族人不得占居會聚」というのは、いかなる意味であろうか。思うに、この時に設けられた別項の規矩が、族人の登録を出生時にまで溯つて義務づけ、それを怠ったばあい「後雖年長。不理爲口數給米。」と定めたり、請米の手續を詳細に規定して「失曆子者。住給。」と定めたり、あるいは「積存月米併請者。勿給。」と定め、いず

れも義莊支給の手續をここに至ってにわかに煩細に規定していることとあわせ考えると、あるいは族人が衆を持んで義倉を占居し、支給を強要したような事態が、この規定となつてあらわれたのかもしれない。

このうち 1099 (哲宗・元符二) 年、1106 (徽宗・崇寧五) 年、1107 (同・大觀元) 年、1113 (同・政和三) 年、および 1115 (同・政和五) 年にそれぞれ規矩が追定されたのち、1117 (同・政和七) 年には、純仁が得た勅旨を掲げて仲淹初定いらいの全規矩を列擧したうえ、

若有違犯。仰掌管人或諸位。備錄治平元年中書劄子所坐聖旨。申官理斷。各令知委。

の一條を附記して石刻され、吳縣城郊外の天平山に建立された。これらのち祖規と呼ばれた規矩である。

以上の規矩によって、范氏義莊は義田・義宅・義倉・(義塾) から成り、族人の衣・食・住の生活を支える目的で設置され、とくに食については常々二年分の儲えを持って、凶歳といえども平江府在住の族人には義米を均給すべきものとして設けられていたことを確認し得るであろう。

規矩が續定される一方では、義田の増廣も行われた。宋

史列傳卷七三の范純仁傳には、

自爲布衣至宰相。廉儉如一。所得奉賜。皆以廣義莊。

とあるが、家乗卷一四義澤記・義田總數によれば、

宋神宗元豐二 (1076) 年。忠宣公增置祭田一千畝于天平山。

とある。^③天平山は仲淹が曾祖以下三代の祖先を追福した白雲功德寺のあるところである。ただ、この千畝は祭田と呼ばれているが、祭田の規模としては異例に大きく、恐らく清水氏のいわれるごとく「その餘資を義田と同じ宗族贍養の目的に充當してゐたものと思はれる。」^④

むしろ祭田としては、1109 (徽宗・大觀三) 年に支使房 (仲淹の從兄巨の裔孫) の范正卿が天平山白雲功德寺に助入し祖先香火の用にあてた菴田八〇餘畝を呼ぶのがふさわしい。^⑤かくして范氏義莊は略々二倍に増廣され、規矩も完整したと考えられた直後に南北宋の混亂期に遭遇したわけである。

第二章 南宋時代の范氏義莊

之柔規矩の續定と増田 靖康の變のち即位した高宗も 1129 (南宋・建炎三) 年には杭州に逃れ、これを追う金軍は

翌年平江府城をも大掠し去った。范氏義莊も當然に兵火のもとにさらされたが、その状況を親しく目睹した仲淹四世の孫忠宣房の直方なる者は、1149（高宗・紹興一九）年に次のようにいう。^⑥

當宣和末、避亂南渡。紹興乙卯（1135）。自嶺海被召至行闕。丙辰春。出使至淮上。始過平江。時義宅已焚毀。族人星居村落間。一旦會集於墳山。散亡之餘。尙二千指。長幼聚拜。慈顏恭睦。皆若同居近屬。

すなわち城内の義宅は兵火に焼かれ、二百人の族人は散り散りに城外の村落に難を避けたのである。また既引の樓鑑の復義宅記には、義宅焚毀の情況についてさらに詳しく述べており、

中更兵毀。族黨星散。故基榛蕪。編民豪據。爲居宇。爲場圃。僦直無幾。甚失遺意。粟無所儲。寓於天平山墳寺。倍有往來給散之勞。尋復圯廢。改置城中。反寄他舍。病此久矣。

とある。荒廢した義宅地内には族外の豪民が無料にひとしい借賃で居宇をつくったり、菜茹をうえたりしていたのである。義宅と地を同じくした義倉もまた焼かれ、郊外の天平山にある菩提寺、白雲寺を借りて義米を集儲したために、族人が義倉に往復する勞は倍増した。やがて、城内に

戻りはしたが舊地には置けず、かえって他人の倉屋を借りて倉敷料を出す始末で久しいあいだ不便した、という。

その後、前引の復義宅記によれば、1196（寧宗・慶元二）年には舊地を占據する居民に租賃を全免して移轉を約さしめ、應じない者は官司に訴えて放逐し、悉く舊地を復して周圍一千四百四十七丈の墻垣をめぐらし、うちに歲寒堂を再建して仲淹の祠堂を設け、また屋十楹を結んで貧族を處らしめ、義倉をも新建することに成功した。そしてこの歳に規矩一二項が續定された。これが1210（寧宗・嘉定三）年、當時朝散郎兼侍講の仲淹六世の孫・監簿房の范之柔^⑦によって再び勅認を得た、いわゆる清憲公（之柔）續定規矩であるが、その原案は恐らく義宅の復興にあたった之柔の兄・良器が、1195（寧宗・慶元元）年に一年間自から義莊の出納を掌ったときの經驗にもとづいて成ったものであるう。この之柔續定規矩は、一族子弟による義莊運営にたいする障害行爲を例示して、禁條を設けているが、それらは祖規石刻いらい義莊がいかなる種類の新しい困難に遭遇したかを物語る。

まず、この時期にもっとも轉變した義宅については、

義宅地基。久爲外人占據。今來復業。甚爲艱難。宜體文正公之意。專爲聚族之地。卽不許族人占造私宅等用。如有違。罰全房月米一半。仍勒還原地。

と、宅地は族外人に占居されると、返還を求めるのが甚だ困難であることを指摘し、同時に族人もここに私宇などを造ったばあい、罰として全房すなわち本人が所屬する房の請米曆子内に登録された全族人の義米支給を一年間停止し、その地は義宅地に返還させる。義宅地は専ら聚族の地として維持すべきものであるが、このばあいの聚族の地の謂は、族内の貧窮者を收容すべき義宅や范仲淹の祠堂が設けられている地内ということで、家乗卷一六義莊歲記（以下義莊歲記と略稱）の1208（寧宗・嘉定元）年に、

起賃屋二間。

とあるのも、恐らくは義宅として増添されたもので、賃屋とあれば、このころに家賃を徴収するようになったのかも知れないが、いずれにしろ聚族のための義宅・義宅地はかかる性格のものであって、族人が自力でこの義宅地外に私宅をかまえることは差支えなかったのである。

次に一時義倉を置いていた天平山白雲寺について、

：間有族人輒敢於（墳塋）上牧羊。並偷斫林木柴薪。近雖行下義莊。專一責令墓客看守外。今後如有違犯之人。諸房覺察。：とあり、すでに祖規においても「縦人採取竹木。」するとは禁じられていたが（1073年）、依然盜伐が絶えず、羊を放牧する者があることをあげ、今後は墓客をして看守せしめると定めている。さらに白雲寺について、

天平功德寺。：爲子孫者。所當相與扶持。不廢香火。今則不然。多有疎遠不肖子弟。請過義米歸已。却返齎食於寺中。至有欺詐住持。逼逐僧行。假借舟船。役使人僕。詎托私酒。偷伐林木柴薪。強占常住田地布種。或作園圃。不還租米。以致常住空虛。住持數易。日漸敗壞。今後探聞違犯之人。罰全房月俸兩月。欺詐住持及占種田地者。罰全房月米一年。：田地。退還常住爲業。：

とあり、疎遠不肖の子弟が白雲寺に義米の支給を強請したり、舟船を假借し、人僕を役使し、密造酒を強要したり、さらにその常住田地を耕作しながら租米を納めない、などの行爲があつたことをあげる。ところでここに見える常住田地とは、范氏義田といかなる関係をもつたものであろうか。右文によって、常住田地は白雲寺の香火資辦のために設けられたものであることは明かであるが、族人がここにも義米を請求しているところからすると、香火資辦の餘米

を義米の一部として負擔していたものではなかったかと疑われる。すなわち、常住田地は一般の義田と祭田とを兼ねており、その管理を住持に依託してあったものではなからうか。かかる例としては清水氏既引の劉克莊の後村先生大全集卷一五五の安撫殿撰趙公に、

居衢之開化遷西安。…諱希濤字無垢（1194～1251）。…做范文正公遺意。買田義庄。命僧出納。以享先贈族。

とある例が、やや時代を後にするがあげられる。常住田地を族人が租佃することを禁じたのは舊石刻祖規を踏襲したものであるが、また、これを義田一般において再び獨立した一項として規定して次のようにいう。

近來有恃強公然於租戶名下奪種者。及頃捺義莊田涓涓浜車漕種麥。不容租戶車水上下者。爲害甚大。今後探聞有違犯之人。罰全房月米半年。

族人には租戸の耕作地を奪取したうえ、租戸の名のもとに義田を耕作したり、水陸の要路を私占して租戸の耕作を妨げたりする者があり、義田の運営に甚しい障害をなした。また、

義莊租戶。所當優恤。使之安業。聞有無賴族人。將物貨高價販賣。

という例示は、族人のうちに租戸に高價に物資を押賣りする者がいたことを物語る。また、

舊規。義莊事務。惟聽掌莊子弟。自行處置。雖是尊長。不得侵擾干預。緣違犯者未曾有罰。是以近來多有族人。專爲貨賂。不顧義莊利害。或爲攬戶。兜納苗米。必要多增貼耗。

とある例示は、掌莊（舊規の掌管人）子弟を賄賂で動かして苗米の包攬を行い、それによって租戸から耗米を多増して私利をはかる族人がいたことを指摘する。租米の徴收は掌莊が「自行處置」すべきこととされていたので、包攬をゆるさなかつたのであろう。右文はさらに續けて、

或主張不逞之徒充應脚力及墓客之類。甚至鼓誘外郡族人。挾長前來。擅開倉廩。妄用米斛。恣行侵擾。意在破壞。

と例示し、不逞の徒と結んでそれらを脚力（文書傳達の飛脚の類）・墓客の類に就職させることを強要したり、平江府外の族人の有力者と結んで妄りに義米を支給させたりする族人があつたことを述べる。これらの族人にたいして、之柔續定規矩は族人の不肖子弟を平江府から追放することとを規定した。すなわち、

諸房聞有不肖子弟。因犯私罪。聽贖者罰本名月米一年。再犯者除籍。永不支米。姦盜・賭博・鬪毆・陪涉及欺騙除籍之後。善良之類。若戸門不測者非。

長惡不悛。爲宗族鄉黨善良之害者。諸房具申文正位。當斟酌情理。控告官府。乞與移鄉。以爲子弟玷辱門戶者之戒。

とあるのがそれである。一方、義莊運営の責を負う掌莊子弟については、

舊規。掌莊子弟侵欺。徑行申官理斷。勒令賠填。近自移建倉宇。遴選主計。此弊稍革。深慮日久玩習。合行關諸房。今後掌莊子弟。如有違犯。許諸房覺察。申文正位。委請公當子弟。對衆點算。取見實侵數目。以全房米米填還。足日起支。仍控告官府。乞行徵治。以爲掌莊侵欺者之戒。諸房子弟卽不得專擅興詞。素煩官府。

と規定している。既述のように良器は一年間義莊を自から運営し、その後を族人子弟二名にひきついだが、義莊歳記には、1195年の掌莊に良器を誌し、翌年には公信・公度の兩名をあげる。このうち一名が右文に見える主計として義倉の管理を掌ったのであろう。これ以後義莊歳記の記録する掌莊は概ね複數であることが、またそれを裏書きする。また、右の規定は掌莊子弟の違反行爲を官司に控告する手續きを更改しているが、ここで公當子弟というのは、一族の子弟にして官界に籍を有する者をいうのであろう。

これらの規矩は 1195（寧宗・慶元元）年に成って族人に

榜示され、1210（同・嘉定三）年に勅旨による公認をえ、再び平江府が族人の控告を受理することが確認されたのであるが、南北宋の過渡期いろいろの混亂を范氏義莊は五〇年餘にして漸く拾収しえたのである。

しかし、當時の義莊經營ぶりをうかがうに、1197（同・慶元三）年には、

聚族數千指。公（范良遂）慮給與不繼。置田租五百餘石。名小莊。補義莊之乏。

とある。^④良遂は良器の兄で屢々副榜に預りながら及第せず、ついに仕途を斷念して杜門自守した者である。この小莊の設置を家乘卷一四義田記・義田總數、義莊歳記では、

良遂增置義田五百畝。

と誌す。^⑤さらに 1208（同・嘉定元）年の義莊歳記には、

增置田一十畝。助族喪葬。

とあり、1214（同・嘉定七）年の義莊歳記には、

置周國公（范壻）墳西山井地約六畝有零。又置山地一十畝。

とあり、規矩續定と同時に義莊は山・地を含んでやや増廣されたが、良遂の子持家の傳には、

理宗端平初（1234）。歲歉。租不足於給。乃與仲弟達家。備米若干石。助給族衆者一月。

とある。すなわち、歎歳には族人の私産の醸出によって、族人の生活が保證される程度の經營状態であった。

1160（理宗・嘉熙四）年に提領浙西和糶所が毎畝米三斗を科糶したが、長洲・吳兩縣の勘糶官の具申にもとずき、風化の關わる所として特免した「范令公義莊田」の數が記録されている^⑥。それによれば長洲縣に在る者が二千二百七十一畝三角、吳縣に在る者が八百九十七畝、總計三千百六十八畝である。今これらの由より畝當り租米八斗の收入を得られたと假定すると二千五百三十四石四斗餘り。これを族人一人一年の義米支給額三石六斗をもって除すると七百四人に支給できる量である。しかし良遂の傳に見えるように、當時族人は數百人に増加しており、義莊草創期の餘裕ある經營と比較すれば、充分とはいえなかったであろう。歎歳には族人の私産の醸出によって支給をつないでいく状態であった、というのもうなずける。

第三章 元代の范氏義莊

1274（南宋・度宗・咸淳一〇）年、知平江府潛説友は仲淹の專祠を城内義莊の東に建立し、沒官田土三百畝を撥し、

その租米をもって春秋二祭の費に充てたが、この時に仲淹七世孫・右承房の士燮（1213—1275）を一族の年次長する者として專祠主祭兼司計に任じた^⑦。これが主奉すなわち宗子の第一世である。翌年、蒙古の兵は平江府にも至り、潛説友は降り、士燮は難に遭って歿した。仲淹七世の孫・監簿房の邦瑞（？—1317）が嫡長の故をもつて第二世主奉に就任したが、邦瑞は支使房（房祖は仲淹初從兄弟巨）の宗遜、朝奉房（房祖は支使房祖の子純懿）の邦翰の二人を主計とし、新たに提管を設けて郎中房（房祖は仲淹同高祖兄琪の孫世延）の士貴（1244—1314）を擧げた^⑧。邦瑞は統族四十二年、宋元の交替期の義莊を提管・主計とともに運営したが、當時の職務分掌は不明である。ただ、范氏義莊は宋代において差役と科率の特免權を與えられており、之を續定規矩では縣の胥吏がこの既得權を侵して故意に騷擾したばいには、平江府に直訴する規定を設けていたほどであるが、宋元鼎革の際にこの既得權が屢々無視せられた。義莊側では新支配者に前代の既得權の再確認を求めて鋭意努力し1294（元・世祖・至元三十一）年に聖旨の明文をとりつけることに成功した^⑨。その申請がいずれも提管士貴の名で行わ

れているところからすると、主奉が祭祠を掌るのに對して、提管は義田運營を分掌したものと思われる。その狀文で士貴は自からを、

先賢范文正公嫡孫。見充平江路學職・兼管本族義莊義學勾當。即日在本路天平山住坐。

と述べる。^④すなわち、提管は天平山に住居しており、城内の仲淹祠を祭る主奉よりは、郷居していることによつて、義田經營に密接していたのであろう。

ところで元朝治下の義莊運營については、1277（元・世祖・至元一四、南宋・端宗・景炎二）年の義莊歲記に、

興建義學於天平山南三讓里。爲屋三十餘楹。選族人有學者充教授。以教子弟及四方來學者。提管（士貴）櫛節浮費。增置田山一百五十畝。充義學之用。

とあり、義學を設けて田山二百五十畝を増した以外は詳かでない。

第四章 明代の范氏義莊

義田の沒官 元明の交替期に義莊がいかにあつたか。

1354（元・順帝・至正一四）年から1374（明・太祖・洪武七）

年の間主奉に任じた監簿房邦瑞の孫・廷珍の傳は、^⑤

當元之末造。張士誠竊據。時公（廷珍）能斂德固守。無違於禮。致祭以誠。接族以睦。族人共賢之。

と誌す。元明交替期の騷擾の渦中にありながら禍いされなかつたかに見える義莊は、この直後に非運にみまわれた。

1384（太祖・洪武一七）年の義莊歲記は次のように誌す。

（主計）元厚違悞秋糧。籍沒長洲縣金鵝鄉義田二千畝。

1240（南宋・理宗・嘉熙四）年當時確認された長洲縣所在の義田が二千二百七一畝餘であつたことからすると、この沒官義田二千畝という事實は、宋末の義田が殆んどそのまま明初に維持されたことを裏付けると同時に、宋末いらい運營されてきた義莊が、ここに至つて決定的な打撃を蒙つたであろうことを思わせる。事實、1250（代宗・景泰七）年に都察院照磨の職にあつて沒官義田の追復を奏請した、郎中房・子易（1400—1468）の傳には、

先是。文正公義田三千畝。洪武初。有二十餘頃（？）寄族孫厚戶。厚犯事。義田亦籍入官。公既任院職。即具疏奏。其略曰。一旦范厚故。抄及義田。致一族人口衣食不周。情實可矜。…

と、沒官いらい、一族の困給に困難をきたしたと述べている。右文からすると、義田が籍沒された事情は、范元厚が自己の私産の秋糧を違悞したために、彼が主計として管轄

した義田もまぎぞえにされたものらしい。しかし、それにしては二千畝の没官は過酷である。上引の子易傳は、彼の追復上奏の結果を、

…事下部議。以年遠格不行。公復再疏陳請。卒不允。

と不成功に終わったことを誌すが、その理由は「年遠」にあったとし、もし没官の當時に有力な族人がおれば没官は免れた印象を与える。しかし、その當時にも一族には監察御史に任じた者がおったのである。すなわち家乗卷十登進志・第十三世に、

從文 監簿房

明太祖洪武十六年癸亥(1383)。由歲貢薦辟授監察御史。改戶部主事。後謫成。召還。歷任金華・東安・金鄉三學教諭。

とある人物がそれである。この從文は、

蘇人范文從。仲淹之的派也。洪武間。拜御史。忤旨。下獄論死。太祖視獄案。見姓名籍貫。遽呼曰。汝非范文正後人乎。對曰。臣仲淹十二世孫也。太祖默然。即命左右取帛五方來。御筆大書先天下之憂而憂。後天下之樂而樂二句。賜之。論免汝五死。

と傳えられる挿話の人物であろう。ところでこの「忤旨」

と没官とは直接の關係はなさそうであるが、かかる顯官を族人にもちながら「違悞秋糧」のみで没官された田を追復できなかったのはおかしい。やはりこの没官は政策的な背景をもったもので、胡惟庸の亂を隔ることそう遠くなかった當時において、なんらかの政治的紛争のまぎぞえになったものであろう。

この没官に加えて、1416(成祖・永樂一四)年、仲淹十二世の孫・監簿房の孫で主奉の元紹が税戸の人材なりと薦められ、京師に赴くための行李費を捻出するために典出した義田三百畝が、彼の急逝によって取贖が果されず、義田はさらに減少し、そのため主奉は暫く空位のままであった。

翌1477年、文正公祠に謁した監察御史陳智なる者は、主奉を缺くほどに荒廢した義莊を憂え、自から一族の賢なる者をして主奉に就かした。主奉に任じた監簿房の元理(1382—1463)は官司の援助により盜賣された義田を收贖し、一族を會集して家規を申明し、「盜賣田産、遺失手澤」の禁約を設け、1426(宣宗・宣德元)年に蘇州府の公認を得て族内に榜示した。

しかし、1480(同・宣德五)年、義田を清理した工部侍郎

周忱 (1381—1453) は當時の義田の情況を次のように傳へる。^⑧

查理。先賢范文正公所置義田。原該四千餘畝。今所存。僅有一千三百餘畝。有因子孫得罪而沒官者。有因戶役艱窘而典賣者。有被權豪恃勢侵占者。其見在之數。又因族人違規耕種。不納租米。及佃戶・莊幹。埋沒欺隱故。每歲所收租利。止將輸納夏秋二稅。供給馬站等項支用。尙猶不敷。並無升合贖及宗族。

ここで「原該四千餘畝」という根據は詳かでないが、元理がさきを取贖した田をも含んで、現存した義田が千三百餘畝であったことは明かである。宋代に確認された吳縣所在の義田八百九十七畝に、その後を増置された潛説友撥充の田三百畝と義學公用の田一百五十畝とがいずれも吳縣に存在したと假定して加えると、この時に周忱が確認した千三百餘畝という數に符合する。ところで周忱は、

…欲查考田地條段租米出納。本莊並無簿籍可照。主奉提管。惟以片紙逐時私記。致起族人猜疑非議。

と當時の義莊運営の粗雑さを指摘し、

着落主奉范原理・提管范原英・范希寅等。逐一清理田畝條段四至・佃戶姓名・租米數目。畫圖貼記。置立文簿一樣四本。用使付印鈐記。為一本付城莊主奉收掌。一本付鄉莊掌記收掌。一本

付提管收掌。遇至交替。明白交割。一本付天平山功德寺住持寄庫收掌。以憑互相查考。

と今後の運営方法を指示している。^⑨ 右文に主奉は城莊主奉とあり、掌記すなわち主計は鄉莊掌記とあれば、前者は城居し、後者は郷居する者であつたらしいが、また、提管も亦依然と郷居していたようで、1457 (英宗・天順元) 年に「將本莊山蕩樹薪易。漸置官民田地山八十九畝五分六釐三毫」と義田地山の増廣を申告した范希寅の肩書は、

直隸蘇州府吳縣至德鄉十一都一區范義莊提管范希寅

とある。^⑩ 沒官以後の義田は恐らくさきに推定したように、宋代いらい存続した吳縣の義田を残すのみとなり、従つて義莊提管も吳縣に郷居する者を選んで充てたものではなからうか。しかし、この千三百畝の租米收入をもつてしては、舊規に定められた額の義米を各族人に毎月支給することは不可能であつたであらう。周忱は族人の「違規耕種。不納租米」と「佃戶・莊幹。埋沒欺隱」とのために義莊の收入は税糧・馬站の費を納入するにも不足がちで、族人への支給の餘裕は全くなかつたと誌すが、既引の主奉元理の墓誌銘には、

…義莊祖規遺澤。久已散逸。子孫侵漁者衆。先生毅然以起廢爲己任。遂重立提管主計。司莊之出入。以絕侵漁之弊。正宗法。申家規。給族人婚喪。…

と誌し、ややおかれて1541（世宗・嘉靖二〇）年に族人に申訴されて黜革された十二世主奉・監簿房啓父の傳には、

性貪狡。培克義租。婚喪所賄。皆不給。

と誌す。いずれも葬喪と婚娶には言及するが、その他の支給、とくに毎月米の支給には觸れない。ただ、啓父の前任の主奉汝興傳には、

明正德庚午（1510）舉人。爲義塾掌教。主祠事。統族二十年。

と主奉に任じられる前に義塾にあって子弟の教育に任じたことを傳える。これらを通じてみるに、没官後の義莊はすでに毎月米の支給には力なく、義塾の子弟の教育にはなお支給をつづけたが、その餘は辛うじて葬喪・婚娶の支給を維持するに止まったのではないか、と想像される。

啓父は元理の曾孫汝興が鄭氏から迎えた嗣子であったが、黜革されるまで主奉に任ずること二十二年間（1520—1541）、その間異姓をつらねて宗を亂し、宗器・手澤の類を典賣しつくし、「祖宗數百年之業。至此大壞矣。」と誇られ、その傳で痛罵されている人物であるが、その黜革に先

立って范氏義莊の運営に再び悲運がみあった、蘇州府知府王儀による田地斗則牽攤による増税である。

均賦改革と義田 1538（世宗・嘉靖一七）年の義莊歲記はその事情を、

先是。吳邑官民田地辦糧。輕重不一。義莊田地。輕多重少。是年。郡守王公儀丈量合郡田地。將吳邑田各斗則與金花・田耗。牽攤每畝正・耗米三斗四升四合。雖有除免先賢文正公義田耗米五十七石九斗八升零。而實徵正色・折色。大浮于舊。由是。義莊空匱。執事者捐產輸納。幾至破家。

と誌す。すなわち、輕税の田が多く重税の田が少なかった范氏義田は、王儀の均賦改革によって、その耗米部分を特別に免除されたにもかかわらず、新たに課せられてきた本色・折色の税糧の額は、結局従前よりも増加することになった。崇禎吳縣志卷七田賦上所載の嘉靖十七知府王儀歸正會計冊には、

吳縣清正田地山塗。每畝攤徵平米三斗四升四合。內約正米二斗九升六合四勺八抄六撮。…正加耗四升七合五勺一抄四撮。…

と均賦改革後の畝當り税糧徵收額の内譯を誌す。このうち耗米部分の四升七合五勺をもつて同地志同卷所載の嘉靖十七年知府王儀攤耗丈量田冊に見える范氏義田が除免された

耗米の細數五十七石九斗八升一合八勺を除すると、約千二百二十畝六分の數値を得る。義田が周忱確認の千三百餘畝の後に希寅申告の若干を増廣したにもかかわらず、ここに至って再び減じているのは、主奉啓父の亂脈經營によるものであろう。この増稅決定に際して、啓父がとった態度は、

郡守王儀均吳郡賦。義莊田皆加額。亦不爲申訴。佐理義莊者。

遂緣賠賦。蕩析家產。

とある。すなわち、啓父は既得權擁護の運動を怠ったのみならず、彼が着服した義莊收入の賦稅部分を代納するために、關係者は破産するほどであった。こうなつては族人にとつて、かえつて義莊の存在は重荷となつたであらう。啓父の黜革のあと三年の間に、主奉が二人も代り、そのいずれもが歴代主奉に任じてきた監簿房からでなく、郎中、忠宣房といういわば主奉としては傍系の房から任じられているのは、この間の義莊運營の苦澁を推測させる。

1544 (世宗・嘉靖二二) 年、監簿房十六世の孫・惟立 (1515—1583) が主奉に任じ、四十年間その地位にあらつた。惟立は明代に入つて一族が出した二人目の進士 (一五四〇・嘉靖一九年合格)、のち浙江按察使、江西布政使など

を歴任して南京太僕卿に至つた惟一 (1510—1584) の弟である。主奉に任じた惟立が啓父の怠つた糧稅輕減の運動を行い、官界にあつた惟一がこれを手傳つたことは想像しやすいことであらう。やがて義田は再び糧稅輕減の特權を與えられた。

1556 (世宗・嘉靖三五) 年の義莊歲記は、

巡撫方公廉・郡守王公道行軫念。先賢義田與諸田則一例起科。非優恤之道。相與定議。每畝止科定額之半。…

と誌す。崇禎吳縣志卷八田賦下に初見する萬曆十七年 (1583) 巡撫都御史周繼知府石崑玉詳定經賦冊の田糧斗則には、

吳縣實在官民田地山蕩七千一百四十一頃二十九畝三分四釐五毫。內三斗四升四合田四千一百八十五頃九十七畝七分九釐一毫。該米一十四萬三千九百九十七石六斗四升一勺。〇一斗七升二合范莊田一十頃五十二畝五分五釐六毫。該米一百八十一石三升九合六勺。…

とあり、また、同志同卷の萬曆四十七年 (1619) 巡撫都御史胡應台知府沈萃楨定經賦書の田糧斗則には、

一斗七升二合范莊田一十頃七十二畝五分七毫。平米一百八十四石四斗七升一合二勺。

とあり、ともに范氏義田は吳縣の田に一律に課せられた税糧額を半減する田として記載されており、この方濂らの處置が義田の既得權として遵守されたことがわかる。既引の1566年の義莊歲記には、この税糧輕減處置について「雖不能盡復其舊、而子孫賴之。」と評す。これが事實であるとするれば、王儀の均賦改革以前の義田税糧がいかに輕額なものであったかがうかがわれる。なお萬曆年間の兩賦冊から、1589年當時の義田は、王儀の改革以後にさらに百七十畝餘を減じて千五十二畝五分五釐六毫であり、1619年には十九畝九分五釐一毫を増して千七十二畝五分七毫であったことが判明する。王儀の改革以後の百七十畝餘の減少は、方濂の優恤處置以前の期間に恐らく主奉啓父の亂脈經營によって減じたものであらう。結局、啓父は前後約三百四十畝の義田を他賣したことになる。また、この糧税輕減の對象としての田が、吳縣の義田のみを對象としているのは、すでにここに至るまでに吳縣にしか義田が存在しなかったであらうとの推定を裏書するものである。

このあと義莊は再び監簿房の惟一・惟立らの後裔を中心に運営・増廣されたが、明代の范氏一族の榮華を獨占した

彼等が、義莊にたいしてとった態度をうかがってみる。

范啓暉の後裔と義田 惟一らの父啓暉の曾祖父元瑛・祖父從江は長洲縣の支硎山に世居したが、父汝信は吳縣陽山の沈氏に入贅し、啓暉の四歳の時に歿した。啓暉の生年は1481（憲宗・成化一七）年、明初の義田沒官ののち約百年である^⑤。沒官によって義莊支給の規模が縮少したのち、これまで衣食住を保證されていた族人は、俄かに生計の自立を講じねばならなかったであらう。族人のうちには他郷に食をもとめる者も多かった。惟一の後援で仲淹いらい六百年後にはじめて族譜を修した友類は、1577（神宗・萬曆五）年、族人四散の狀況を誌して次のようにいう。

奈家乘散亡。老成凋謝。無可考證者多矣。況族人星散四方。一時不能遍歷。以捃摭之中間。所載不無遺失之憾。如河南・山東・陝西・湖廣・廣東・江浙等處。皆有吾宗之支流餘裔存焉。後有作者。苟得歷其地。而詢訪收拾之。

蘇州に残った族人の職業も色々であった。ある族人は義田を「違規耕種」したことは既述した。その他に、あるいは佐貳・雜職・教職など下級の官に任じ、あるいは胥吏ともなり、またあるいは舌耕すなわち學を講じて束脩を得た。

「良相たらずんば、良醫たれ」とは仲淹の所言として流布

した俗諺であるが、醫術で身を立てる者もあった。この啓曄は商人になったのである。すなわち、その傳は、

少學書。以孤貧弗克。竟自蘇來賈華亭之泗涇。于是時。泗之賣人以百數。獨君被服言動。儼然儒者。泗之人咸愛敬君。君亦盡交其豪傑。因家泗上。…後二十年。君益有田宅。…

とあり、別傳には伯父に従って泗涇鎮に往ったとあれば、伯父も商人であつたのであろう。この他にも族人で商業に従事する者があつたことは、1456（明・代宗・景泰七）年に歿した士平なる者の子希榮について、

范希榮者。文正之裔孫。嘗與他商行貨。道遇暴客。見其姿美。問曰。汝秀才耶。曰。然。吾范文正之後。暴客曰。好人子息也。凡舟中之物。悉不取。

との挿話もあることよって知れる。これらの文によつても啓曄、希榮がともに世家の子孫の俄か仕立の商人であつたことが彷彿されよう。

啓曄は惟一・惟立・惟丕の三賢子に恵れた。長子惟一は、公生而質敏。甫就學。業制科。有奇悟。還補邑諸生。以經學師授弟子。

とあり、泗涇鎮から吳縣にかえて生員に補せられ、舌耕のかたわら勉學、のち1540年に進士に合格したのである。

その後の履歷は既述した。惟立も儒業を怠らなかつたが、彼が生涯主奉に任じたのは、弟の惟丕が1559（世宗・嘉靖三八）年にまた進士に合格して、早くに仕宦したため、「公（惟立）有學而獨扼於（主奉）位」ということであつた。惟丕は光祿寺少卿、雲南按察使副使などを歴任し、惟一とともに詩人としても著名であつたらしいが、その傳は不詳である。一方、主奉としての惟立の業績については、その傳に、

祖規。爲文正祠主奉者。歲給祿米六十石。公爲主奉四十年。常祿悉捐補祠內。復出己貲以調族之貧且賢者。…

とあるのみで、税糧半減の特權をとりつけた以外に、その功績は顯著ではない。むしろ晩年は巨室を敵對視する高拱（河南新鄭の人 1512—1578）の政策にわがわいされ、泗涇に隱棲して歿したという。すなわちその傳は次のように誌す。

夫何新鄭柄國。故傾臣室。吳地豪強好訟。羣起爲奸。亦波及公。公僅僱業。亦乘機攘竊去。公遂食貧。至不能舉火。太僕公（惟一）每爲支給。而公退居四里時。與騷人詞客賦詩自娛。…甫數年乃卒。卒之日。家事蕭然。積逋在門。太僕公咸與之經理。

惟立の負債を清理した惟一は官界にあって財をなし、致仕

ののち庭園を創して吟遊したといい、その墓誌銘^⑧には、

…致仕。公歸闢囂園。創天游閣。遇佳風日。偕郡中縉紳名輩。婆娑泉石。賞晤終日。意適然適也。

というが、その宗族にたいする態度については、

一再至吳門。合族講家範。以訓飭子弟。

というのみである。

惟立の歿したあと、1584（神宗・萬曆十二）年にその嗣子允恒（惟一の第三子）が主奉を繼いで統族十二年、この間に惟丕の二子允謙（1549—1579）・允臨（1558—1641）のうち允臨が、1595（同・萬曆二十）年の進士に合格した。父子二代、進士の榮を得たわけである。允臨は雲南按察使僉事、提調學政、福建布政使司右參議を歴任して致仕した^⑨。允謙は父母の歿後もその財を均分せず、そのまま允臨に與えたといわれるが、允臨は致仕ののち華亭から再び吳縣に移居した。その墓誌銘には、

公歸而築室天平之陽。徙家居之。日夜流連鵲吟。討論泉石。數與故人及四方知交來吳者。往還遊嬰山水間。稍暇則簾閣據几。命筆揮酒。以應遠近諸購者。訖不復措意功名矣。

とある。允臨もまた詩才に富み、八十餘歳の長壽を悠悠自適したらしい。このとき允臨が築いた庭園は後世に残り、

賜山舊廬と名をかえて蘇州名所の一つとなった。乾隆蘇州府志卷二七第宅園林一には、

天平山莊。范參議允臨所築。在其先文正公高祖桂國公麗水承簡墓側。依山爲樹。曲池修廊。春時游人最盛。…更名賜山舊廬。

と誌し、またその允臨が別に私第をかまえたことは、同志同卷に、

范提學允臨宅。在（長洲縣）臨頓橋北。

とあるによって知られよう。

この間、1597（神宗・萬曆二十五）年に主奉が允恒から兄の允觀（？—1604）に替ったが、當時の義莊經營の狀態について、その傳に、

於時義澤驟廢。主之者至以田質豪族。子母相積。償之以租。所入幾無贏餘。族衆大困。公力爲恢復。捐資代償豪右。

とあり、また、1608（神宗・萬曆三十六）年に儒林房十九世の孫で主奉に任じた彌章の傳には、

萬曆戊申（1608）。族人推公主祠事。會吳中大水歲饑。公拮据補苴。少參公允臨振粟佐之。族人賴以果腹。而公顧義租歲入無幾。仰給者衆。恐再饑無以應。遂辭主鬯。統族僅一年。

とあり、義莊管理者のうちには義田を典賣する者（允恒か？）があり、また他方、饑歲には賙給をせまって主奉が辭

職を決意せざるをえないほどに困窮した族人がいたことが知られる。

ここに至って、漸く允臨は田十頃を助して義莊經營の補助をはかった。すなわち、1625（熹宗・天啓五）の義莊歳記には、

參議允臨助吳縣田五百畝歸莊。以廣賙給。造冊呈憲鈐印。准免雜役徭役。

とあり、つづいて1631（毅宗・崇禎四）年の義莊歳記には、

世孫允臨再助長洲縣田五百畝歸莊。先修祠宇。後備賙給。巡撫張公國維批仰長邑照吳縣田例。造冊鈐印。一體給帖。優免泛役。

と誌す。前者吳縣の田五百畝は族人への賙給のために、後者長洲縣田五百畝は祠宇修葺の資を支出し、その餘に族人への賙給を行うために設けられたのであった。

第五章 清代の范氏義莊

必英・能清規矩の續定 1643（清・世祖・順治二）年、清朝は江南平定の捷詔を宣布した。三度の王朝交替を迎えた義莊が蒙った影響は、やはり前朝で得ていた特權の喪失であった。1661（聖祖・康熙元）年の義莊歳記は次のようにいう。

義田差役。前朝俱蒙蠲免。鼎革以後。主事者失於檢察。遂爲里胥混報。與民田一例徵收。兼以均役議起。預徵法行。科派煩擾。稱貸以濟。

税糧については、江南平定の前年に明代の舊籍を得た新王朝が、明末加派の税餉を除くためにすでに萬曆中の税額によつて徴收することを決めていたから、あるいは半額輕減の既得權は守護されたかもしれない。しかし、差役・雜役については均役の創始によつて義田も課税の對象とされて既得の特免權が認められなかつたうえ、預徴の法が行われ、義莊は負債してこれに應じねばならなかつた、という。1661（世祖・順治一八）年に主奉に任じた忠宣房二十世の孫・安恭は、就任いらい既得權の復活のために官邊に運動し、翌年、巡撫韓世琦・布政使修彭年を動かすことに成功し、義莊は再び特免權を得た。すなわち、萬曆以前に置かれた義田錢糧の半額輕減と、允臨増置の田を含めて、それらの錢糧（條銀）はとくに十月から納入すればよく（定例は二月に開徵して十月に終る）、一切の差役・雜役は免除されることになった。

しかし、この運動のために義莊は甚大な被害を蒙った。運動に奔走した主奉安恭の傳は、

時均役議起。有司以義田與民田同科。徭役繁擾。公任事之始。力訴憲司。得蒙優恤。而所費亦夥。遂藉是怒行掊剝。…先是。城中書院^⑧。有子孫一人守祠。奉香火。自安恭爲奉祀祠門。不戒於火。旁之廊屋。斥賣殆盡。自知爲族衆所容。益勾結營卒及市井無藉子。爲久踞地。族人群訴安恭於有司。瀋陽族孫忠貞公爲浙撫。移文慕方伯天顏。按罪如律。

と誌す。安恭は1669（聖祖・康熙八）年に黜革されるまで主奉に任ずること九年間、提管・主計などを設けず、城内にあって専斷したらしい。ここに見える「瀋陽族孫忠貞公」とは范文程（1597—1666）の子范承讓（1624—1676）である。范文程は入關前後の新王朝の諸施策をその手に草した人物であるが、彼は范仲淹十七世の孫であった、という^⑨。新王朝の中樞部に族孫を稱する者を得たことが、義莊に僥倖した。承讓は1668（聖祖・康熙七）年に浙江巡撫に任ぜられ、この歳に蘇州を過って仲淹の祠に謁した。この機會を得て「自癸卯（1669・康熙二）迄己酉（1669・康熙九）。子孫數千百指。未得沾義租升斗。族人感怨^⑩。」という状態にあった族人は、安恭の専横を承讓に直訴したのである。承讓の依囑をうけた布政使慕天顏（？—1696）が直々の指揮で安恭は黜革せられた^⑪。しかしここに至るまでには、族

人の申訴のみをもってしては、特權獲得の運動を通じて安恭が知己を得た地方下級衙門をいかんとも動かしえなかったという實情があったであらう。

承讓の捐銀により安恭典賣の祠屋・基址も贖買され、その管理者として、屢々會試に下弟し、1679（聖祖・康熙一八）年の博學宏詞科に薦められて翰林院檢討に任じられながら、官界に意を得ず、ついに義莊の經營に専念した允臨の子必英^⑫（1631—1693）を主奉に得た。必英は1678（聖祖・康熙一七）年に布政使丁思孔・知府高倬の公認をえて榜示された必英續定規矩十項^⑬を定めた。この規矩は前回の規矩修定（1666年）らしい「歳久異宜。規矩勢須酌申。」という理由で改定せられたものであったが、ついで必英のあとをついで主奉に任じたその次子能濬が、1693（聖祖・康熙三二）年、さらに八項^⑭を増定して充實された。

必英の規矩は、(一)嚴出入專司以杜侵冒、(二)儲脩祠供課以防患害、(三)編正雜款項以廣賙給、(四)限酬勞定數以杜冒濫、(五)嚴年終銷算以防侵隱、(六)嚴義莊罰規以肅遵行、(七)體賙貧勸學以示教養、(八)禁佔居田屋以清義業、(九)嚴催佃督責以清公賦、(十)嚴交代詳明以防遺誤の十項よりなる。一見するに第

八項が、

…邇來。義田多族人佔種抗租。祠宇莊墓。多族人久踞典賣。清理維艱。…嗣後。族人佔種義田。許主奉呈官。取具本人退田甘給(結?)。另召承佃。如阻佃拋荒。仍處治本人。祠宇莊墓。止着莊僕看守。不許子孫移住。如特強佔住者。許主奉呈官決逐。

と、族衆對象の禁條であるのを除いて、その餘の大半の條項が義莊運営當事者を對象として規定されている點が顯著な特徴である。

第一項は義莊運營の分掌權限を次のように規定する。

…主奉惟主祀統族。檢核執事。而不預錢穀。所以尊其體也。其司錢穀者。惟主計。司之者。不可不慎擇。尤不可不專一。凡義田租米・茶租・房租・山租。專令經收看管。提管典籍暨莊僕等。止用督催。不許經收。然米必歸公棧。必提管典籍監收。銀錢必歸公櫃。必登報主奉。提管典籍相與互封謹看。主計仍不許私入。若錢穀之出。必由主奉支票。主計據票公發。主計仍不許擅出。至於提管之任。則專司綜理糧折。查勘田祠。督核催佃。酌請公用。典籍之任。則專司簿籍・戶口。稽註出納。俱不許預錢穀。主奉例用關帖。各開明所司。關請任事。

すなわち、主奉は祭祀と統族とを行い、提管・主計・典籍(典籍は明・永樂一七、1419年創置)の任命・監督を分掌するが、錢穀に直接手を下してはならない。錢穀は専ら主計が手を下して收納・管理・支出を分掌する。提管・典籍(と

莊僕)はその收納を督促し、主計の收納に立合わねばならないが、直接に手を下してはならず、提管の分掌は糧折(條銀・漕糧)を綜理し、義田・祠址を查勘し、催佃を監督し、公用すなわち雜項支出を必要に應じて申請することにある。また、錢穀の收納は主奉に報告し、支出は主奉の發する票によって行われるが、主奉はこれらを文書によって行わねばならないとされている。さらに主奉には六十石、三執事には各八十石の酬米が與えられていたが、以後は義莊記過簿を備えて分掌權限に違反することに一過を記して、その酬米を罰除し(第四項)、交代に際しては簿籍と現物を照合して行うこと(第十項)が規定された。

第二項は義莊收入・支出の款項目を規定したものである。

祖遺義田有米。茶租・房租・山租有銀錢。如公莊正雜項所出。樂由田米。而茶・房・山租不歸公用・調給。焉得不少。嗣後。以田米・准租銀・糶米銀爲所入正項而編定。錢糧・祀祖・儲備脩祠供課・調給・酬勞・棧用飯米爲所出正項。於其中。以茶租・房租・山租爲所入雜項而編定。公莊一應雜用。於其中。式做賦役全書。編爲義莊額編正雜項出納全冊各四本。主奉・提

管・主計・典籍各隨出納。互註互核。至於兩項所出。主奉照編分項票支。主計據票公發。不得故消正雜款項。混註混發。如主奉・執事私用茶・房・山租。使公莊所出藥由田米及故消正雜款項混註混發者。定照罰規公罰。

これによつて、義莊の収入は義田からの租米のほかに、これまで主奉や執事（主計・提管・典籍）が私用していた茶租・房租・山租として銀錢の収入があつたこと、仲淹の祖規で禁じていた「糶米」によつても銀を得ていたことが判明する。租米は公棧に、銀は公櫃に收納されたことは第一項によつて知れるが、右のごとく分けられた款項は年終（十二月中旬）に「正項所入田米若干・催佃欠若干・所出某某正項米若干・賜給若干・儲備若干・雜項所入茶房山租銀錢若干・所出某某雜項公用若干・那用缺少若干」の各款項に分けて決算し、全族人に刊示することが主奉と執事とに義務づけられた（第五項）。

ところで族人への義米支給を規定した第七項の全文は左のごとくである。

祖澤本以周急。不以繼富。嗣後。子孫・寡婦・貧無子老至六十、貧有子老至七十者。俱計年遞加優給。其家殷者。雖老無子。例不加給。『貧無以爲葬。或無子者。俱加給喪葬。其家殷

有喪者。止付本年賜給。作喪葬繳曆。亦例不加給。如有家殷子孫・寡婦冒請優給。及加給喪葬者。例罰除其一家賜給。以懲貪冒。其貧戶加給喪葬而不葬。復至混請者。罰亦如之。』至於祖規設義學。教族子弟。今族繁散處。不能在在設學延師。嗣後。會文書院舉業成篇者。諒給紙筆五斗。文理寥通者給一石。文理清通與遊庠貢監。並給三石。得與大比試者。每次科舉米五石。稍示勸勵。以存教族遺意。

すなわち、前段では貧老の族人および寡婦について計年加給すること、貧窮の族人および無子の族人の喪葬に加給するが、反面、家殷なる族人は老年無子であっても加給せず、その喪葬には「本年賜給」を給するのみで喪葬繳曆（喪葬費受給帖であろうか）をもつていても加給しない、と規定する。ここで注意すべきは、家殷なる族人の喪葬には、本年賜給のみを給して加給しない、ということ、その喪葬費は支給しない、ということで、祖規喪葬所定額に加給しない、という意味ではないということである。従つて優老・寡婦への加給も「本年賜給に加えて喪葬費を給する」の謂である。ところで後段の紙筆米・科舉米などが明確に定額を記すのに反して、この「本年賜給」額については必英規矩では言及していない。

能濬の規矩は、これをやや具體的に次のように誌す。

子孫年十六歲。本房房長。同親支父兄。於春秋祭祀時。親同詣祠中。具申文正位。驗實。批仰典籍註籍給曆。至冬。關支本名一戸米。

すなわち族人は十六歲成丁に至って一戸と認められ、以後は毎冬一戸米を支給する、という。この一戸米が本年調給なのである。嘗つて族の個々人を對象に支給すべく規定されていた義莊の支給は、ここに至って支給單位を戸に變え、それに従つて受給の資格は、嘗つての五歲から十六歲にひきあげられたのであらう。また、毎月末に支給すべく規定されていた義米は、一年一回の支給に變つたのである。これが本年調給すなわち一戸米の内容であるが、なおその額については誌すところがない。しかし、それは必英規矩の第二項に、

嗣後。吳縣新舊義田。除完課・祭祀外。一應公用。於其中酌出三之二。餘粒盡數給族。(允臨) 原助長洲縣脩祠田五百畝。除完課外。公用於其中酌出三之一。餘粒盡數積儲。……

とあり、さらに能濬規矩において、

吳縣多山田。長洲縣皆澤田。高下既殊。如遇旱潦。豐歉各異。向雖分別給族・脩祠。不許那混。如遇大澁。仍當通融協濟。儘完國家正供。次及祖先祭祀。其餘主奉・執事・房長・守祠・鳴

贊酬勞、燒香、紙筆、喪葬、調給等項。或減給。或緩給。或捐給。臨期酌行。

とあるところから推量できよう。すなわち、長洲縣脩祠田の義米は一切給族にあてず、吳縣田の義米收入のみをあてる。それもまず本年の税糧と祭祀費用とを天引きし、さらにその三分の二を雜用に除き、残る三分の一を主奉以下の各酬勞米、燒香、紙筆米、喪葬、調給の順次で支給するのである。従つて一戸米は族衆のために餘された分から、さらに定額ある紙筆米(科擧米を含む)を除き、その殘餘を喪葬の加給分(能濬規矩において一戸米單位に五戸までと規定された)を登錄戸數に加えて分けることによって算出するのである。

しかもその分割方法については、能濬規矩の前文に、參議公(允臨) 助田本房親支義米。向優給不等。今依五服之制。推恩遞減。五世而止。庶有限制。

と誌すから、この允臨助入の吳縣田の義米は、監簿房の族孫を中心に多寡の差を劃して支給せられた。以後は遞減して五世後の族孫からはこの差を除く、というのであるが、それまではなお排行によつて差が残存するのである。

結局、一戸米は定額制ではなく、その歳の豐凶は勿論、

賜給に優先する諸支給の多寡によって左右される性質のもので、「或減給。或緩給。或捐給（事實上の無給）・臨期酌行。」すること最も甚しいものであったであらう。のち義田が幾度かの増廣をへて嘉慶年間（1796—1820）に總額五千餘畝に達した際に、その増廣に與つて力のあつた當時の主奉范來宗について、道光刊吳門補乘續編卷十人物に載する傳は、

范來宗。…文正公二十四世孫。乾隆四十年（1776）進士。官至翰林院編修。…族人推來宗統族。力整頓。清宿負。增置田一千八百餘畝。厰屋萬金。生息銀萬金。每戶加給米三斗。共成一石。喪葬助恤考費倍加。

と、當時において一戸米を三斗増して、漸く一石にしたことを誌す^⑧。その時の義田數の半ばにも及ばなかった清初の義田が、どれほどの一戸米を給したかは想像に餘りあらう。この結果、少しでも賜給額を増すには、喪葬の數を増すしかなく、能濬規矩の前文にいうように、

其喪葬。則必限年。若不限年。則年遠者。皆可詭稱。今歲葬祖。明歲葬父。盈于子姓。紛紛陳請。

という、笑うに笑えぬ現象を呈したのである。

當時の族人數は、能濬規矩の前文に「昔之一口。當今之三十口。」といい、この昔時の數は恐らく錢公輔の義田記

所傳の九十口に據るから、三十口は約二千七百口にあたつたと推定される。これらの族人が毎歲一戸一石にも満たぬ義米のみに頼つて生活できないのは當然である。1707（聖祖・康熙四六）年、文正忠宣公全集に後序を誌した能濬自からが、

今吳郡子孫聚處者。不下數千指。大半食貧。自力者居多。

と、大半の族人が貧しく、自立している者が多い、と述べる。貧しくて自立できぬ者こそが一戸米の割當を競つた族人であらう。ここから、われわれは義莊をとりまく當時の族人を次のように分けて考えられる。すなわち、二千七百人の族人には、六十〜八十石の酬米を得る主奉以下數人の義莊運営當事者と一戸米の割當を競つた貧窮の族人とが劃然として兩極をなし、その間に自立している大半の族人——それはまた、嘗つての允臨の例に見たような極富の族人から最低の自立線に並ぶ大半の族人に至る多様性をもつたであらう——がおり、また、五斗から五石に至る紙筆米を支給される舉業應試の族人が特別の待遇を與えられておつた、と。

そして、能濬規矩の前文に「近代以來。冬絹・嫁娶・奴

婢米。已不支放。」とあるが、明初の没官ののちは子弟教育への費用を維持する他は、僅かに喪葬と婚娶の支給を行ったであろうと推定した義莊は、ついに喪葬の支給をとどめるのみになり、衣食住を保證することから出發した義莊は、税糧を完納したあとは、まず祭祀を第一目的に運営され、僅かに残った喪葬への支給も文字通りの賙給すなわち貧者の救済として行われ、族衆への義米支給は最も輕視される性格のものに大きく變貌していたのである。

1705（聖祖・康熙四四）年、康熙帝は南巡の途次范氏義莊に行在し、「濟時良相」の扁額を贈與し、さらに1722（同・六二）年冬、雍正帝は前帝の遺旨を承け仲淹を歷代帝皇廟に従祠したと傳えられる。仲淹にたいする康熙帝のかかる待遇は、當時の義莊運営が第一目的とした文正公祠の祭祀をますます重からしめたことは疑いない。

清代における義田の増廣 義莊歲記によれば、義田は1695（聖祖・康熙三四）年、圩田四畝二分を、さらに1706（同・四五）年に田十七畝を小刻みに増しているが、1729（世宗・雍正七）年に、

郎中房世孫安瑤承父彌勳遺志。助長・元・吳三縣田一千畝。置

廣義莊。

と一千畝を増したことを誌す。彌勳については一布衣であったとある以外は、いかなる人物か不明である。その父郎中房十八世孫・可詢（?—1691）は約二十年間義莊の提管に任じたが、同治重修蘇州府志卷八八人物六に載する傳によれば、

范可詢。字問之。生有至行。悉以遺貲讓弟。族人推舉爲提管經理。子彌勳勤儉起家。積良田千餘畝。遺命其子瑤入義莊。

とあり、遺産を弟に譲ったという。彌勳が勤儉増廣した千畝の田には、父の可詢が得た提管の酬勞が資本として投じられていたかもしれない。廣義莊と名づけられたこの千畝の田は設置と同時に獨自の運営規矩が定められ、監總・校理の二執事（酬勞米各四十石）を置いた運営された。

この布衣にして千畝の田を助入した彌勳の行爲は、聖諭廣訓（一七二四・雍正二年頒布）にいう「置義田以贍貧乏」の指針に沿う模範例として雍正帝に激賞され、清代における義田流行の端緒をなすほどに喧傳された。そしてこれを機會に官邊の支持を背景に范氏義田には「按畝文歩。繪圖造冊」といった全面的清理が加えられた。清理は1731（世宗・

雍正九)年に着手、1746(高宗・乾隆一)年に終ったが、その結果判明した義田總數は若干の地・蕩を含んで三千二百八十四畝九分七釐二毫であつた。これには清理の終る直前に監簿房二十一世孫・儀揆が父興槩の遺志により助入した義田一百畝と、世孫・君偁の増置した白雲寺香火田一十畝とを含む。清理の結果は家乘卷十四・義澤記・義田細數に各縣の都ごとに埒ないし埒までの面積を列擧して記載されており、漸く范氏義田の實態についての具體像を呈供してくれる。^⑧

創置いらい厚薄常なかつたとはいえ、時々の官邊の保護によつて命脈を保つてきた范氏義莊は、范冲淹の帝皇廟への從祠、范彌勳による聖諭廣訓の實踐という事態で、新王朝の獨裁君主の指針に沿う時代の寵兒として、新しい時流に乗った。乾隆帝は1751(乾隆一六)、1762(同二七)、1765(同三二)、1780(同四五)、1784(同四九年)と南巡のたびに、とに文正公祠に遣官致祭したし、顯官名流の過謁は、清一代を通じて絶えることがなかつた。この榮華に飾られた處遇とは裏腹に、當時の范氏義莊の經營は決して潤澤なものではなかつた。道光家乘卷十六義莊歲記の1771(乾隆三二)

年には、

族衆攬食義莊。日數百指。舊逋未楚。又增新欠。

とあり、族人には義莊に乞食するような極貧者が日に數十人を數えたといひ、1776(同四一)年の義莊歲記には當時の義莊の負債が利息をあわせて五千三百餘兩に達し、この負債をめぐつて主奉と主計とが訴訟をかまえる、といった族内の不和が暴露されている。既述の范來宗はかかる事態がもたらされた原因を指摘して次のようにいつている。^⑨

乾隆初。修葺鄉城祠宇。迨十五年。支硎天平兩山名勝興工。公費不足。稱貸繼之。子母糾纏。兼以歉歲。積逋難清。許訟迭興。

すなわち、義莊運營の窮迫は、祠宇や名勝を修葺し、時代の要求に應じて文正公祠の體裁を維持せねばならないところに原因があつた。このために族人への調給が犠牲にされたのであるが、當時この修葺に任じた范宏遇なる者の傳には、

…監理義莊二十年。曾佐辦天平支硎大差。并因義莊修祠。族匪糾衆鬪工。公以一人彈壓。

と、不満の鬱積した族人の行動を「族匪」の名をもって呼んでいる。既引の傳記にみたように1796(乾隆六十一)年に主

奉に任じ、統族二十三年の間に義莊經營を振興し、一戸米を一石に満たした范來宗(1737—1817)は、自から誌す「増置義田記」で、

宗於六十年己卯出而主祀。因大加整頓。與職事等節省。漸次清理。歲稔得有贏餘。自嘉慶紀元迄今(同二十一)。增置絕產田一千八百餘畝。置市房萬金。又生息銀萬金。以防田之荒歉。族丁一千五十餘口。照舊規加給三斗。共成一石。優老助貧喪葬諸項。均爲倍加。不肖歛跡。紛爭止息焉。

と誌すが、なお彼が續定した五項の規矩では、

一、嚴造言。義莊規矩。歷世增修。已無遺議。有造言生事之徒。趁大衆領給之時。覬覦積貯項。欲爲把持以填貪壑。妄造詭詞。簪鼓惑衆。使祖宗良法美意。敗於其言。此爲不肖之尤。卽對衆批斥其妄。俾衷心病狂者。無可置喙。永停其給以昭炯戒。

の一項を設け、義米の支給に際して積貯の分給を要求する族人を「衷心病狂者」として難じている。一般族衆の生活とは隔別して營まれる公祠や名勝の修飾、あるいはこれに従事する主奉・執事の多額な酬勞にたいする不満は、これら族衆が義米領給の際に、義倉の積貯を眼のあたりにするときに頂點に達したのであろう。義莊はこれら不満分子の族人をあるいは族匪と呼び、あるいは衷心病狂した者と刻印し、これを排除することによって運営された。族人の共

有物として、その衣食住生活を保證する目的で編置された義莊は、ここに至って權力方針の具體示例として、いわば國家的必須性を與えられると同時に、ますます族人の共有物とは無縁な存在になっていった、といえるであろう。

その後も義田は増廣をつづけ、道光家乘義莊歲記によれば1816(仁宗・嘉慶二十一年)年、長洲・吳兩縣に二百五十畝を増し、1820(同二五)年には長洲・元和兩縣に二百二十三畝を増し、同治重修蘇州府志卷二四公署四附義莊が載する范氏義田の總數は五千三百餘畝にのぼっている。最も新しくは天野元之助氏「支那農業經濟論上」第一章土地制度第二節族田で、氏自身が昭和十四年三月に、吳縣人の報告によつて范氏義田の存續を確認しておられる。恐らく今次の革命まで范氏義莊は餘命を長らえたであろうが、その増廣の度合からすると、その後一戸米の支給額が、嘉慶當時の毎歲一石をどれほど上廻るようになったかは疑わしい。

結 論

「千年田。八百主」といわれた時代をほとんど九百年に近い歳月をくぐりぬけて、とりわけ土地所有の移動が激しかったと思われる地方において、范氏義莊が宋代創置の義

田をほとんど原型のまま維持しおおせたという事實は驚異に値いしよう。「范氏義田の存續發展という事實が義田普及の一つの原因である」といわれるほどに影響したところも甚大であった。

早くから税糧を軽減され、差役・科率・雜役の特免權を得ていた范氏義莊の變遷をたどるのは、宋代いごの宗族的土地所有と宗族との關係の純粹培養をみるがごとくであるが、以上義田の増減に主眼をおいてたどったところから結論するならば、その長期にわたる持續にもかかわらず、そこに極めて單純な反復的現象が繼起している點を指摘せねばなるまい。その現象とは他ならない族人による義莊收入あるいは義田の私有化の傾向である。

この傾向には、少數の族人からなる義莊運營當事者による義莊收入の私有化と、一般族衆が違規耕種することによる義田の私有化の二つの傾向がある。前者の傾向は、事實上、少數の族人が義田の名を偽った大土地所有者となる傾向であり、後者の傾向は、前者に對應して族衆が佃戸となる傾向である。族人による義田耕種の禁が、族人佃戸が欠租に容易であることから設けられたことを考えれば、この

族衆が佃戸となる傾向は、事實上、族衆が義田を分割して私有化する傾向である、ともいえよう。宗族が共有すべき義田にたいして、このいずれもの傾向は、當の宗族内部からするところの義田の否定である、といわねばならない。

しかも、この傾向がいずれも義莊經營に充分ゆとりがあり、義米支給も潤澤であったと考えられる草創期において、すでに顯著になっていることは、義田が決して宗族内からする要求にもとずいて産みだされたものではなかったことを物語る。問題はあらためて義田が創置された宋代にかえて、范仲淹が義田を必要なものとしたのは、何故であったかを探らねばならぬことになる。

宋代は士大夫の官僚が新たな支配階級として登場した時代である。ところで、この士大夫の官僚の登場と宗族との關係は、當時いかなる關係にあったのであろうか。士大夫の官僚は同族的結合を背景とする門閥的名望によらず、個人の實力・教養によって權力參與者になりうるところに新しい性格があったが、同時に彼等は官僚として當時としては莫大な收入を得ることができた。范仲淹は1000（仁宗・天聖）年に自からの俸入の過厚なるを顧みて、

某官小祿微。然歲受俸祿。僅三十萬。竊以中田一畝。取粟不過一斛。豐稔之秋。一斛所售不過三百錢。則千畝之獲。可給三十萬。以豐歉相半。則某歲食二千畝之入矣。

と述べている。孤身から起身した仲淹は、當時二千畝の田を有するに匹敵する俸入を得ていたわけである。范氏義田が一族九十口を養うのに千畝の田で充分に足りたのと比べて、當時の新官僚の収入がいかに莫大なものであったかが知れるであろう。彼等は、この結果にわかに貴族的奢侈生活に浸りえたが、しかし、彼等には眞の貴族たりえない憾みがあった。すなわち、貴族が連綿とその特權を世襲するのにたいして、士大夫新官僚の貴族的生活は數代つづけば必ず先細りを運命づけられていたからである。それは彼等がまさにそれによって貴族的生活を享受しえた手段——非世襲・個人實力主義の科擧の競争の劇甚さが彼等の後裔を官僚となる可能性から阻んでいたことに一因があった。彼等は子弟の科擧合格を願って、その教育に種々の便宜を講じはしたが、子子孫孫が各世代にわたり科擧に合格して官僚的特權をもって貴族的生活を維持する可能性は、全く僥倖をたのむしかなかった。加えて、彼等が身一代で築いた家産は、他方において、均産分割によって細胞分裂的に細分

化し、その先細りを助長さるべく運命づけられていた。彼等の多くは均産分割による家産細分の運命に従順であったであろうが、なかには南宋の宰相趙鼎のように、家産の分割を子孫に禁止した者もあった。この趙鼎がとった處置と范仲淹の義田設置とを比較すると、仲淹が義田を創置した意圖が浮彫りにされてくるから、少し詳しく紹介してみよう。

趙鼎(1085—1147)は山西聞喜縣の人、四歳にして孤貧となり、やがて1106(徽宗・崇寧五)年に進士合格、のち宰相に至る履歷は范仲淹とよく似ている。のち金軍に逐われて南渡し、家族を金陵に遺して自からは崖州に歿したが、1147(高宗・紹興一四)年、その家族に紹興府等に置いた田産の租課を計口分給することを内容とする家訓三十項^⑤を遺した。まずその田産の維持のために、家訓の第八項で、

應本家田産等。子子孫孫並不許分割。

と分割を禁止し、この田産によって一族が累世同居することとを要求している。すなわち、第十三項では、

田産既不許分割。卽世世爲一戶。同處居住。所貴不遠墳塋。

とする。そして第九項において、

歳收租課。諸位計口分給。不論長幼。俱爲一等。五歲以上給三之一。十歲以上給半。十五歲以上全給。止給骨肉。女雖嫁未離家。并埒甥並同。

と規定する。田産は恐らく族外人に佃耕させたのであろうが、その規模は不明である。また、支給の対象が婿甥に及んだことは規定から明かであるが、一族の口数は詳かでない。しかし、ここで興味あるのは、子孫で官僚に任じた者にたいして特別に設けた規定の内容である。一族の官僚が赴任した際には支給を停止し、歸郷したら再び支給を復活するのは、范氏義莊と同じであるが、第十四項において、

仕宦稍達。俸入過厚。自置田産。養贍有餘。卽以分給者。均濟諸位用度不足或無餘者。然不欲立爲定式。此在人義風何如耳。能體吾均愛子孫之志。強行之。則吾爲有後矣。

と規定する。范氏義莊では陞朝官の支給辭退を勧誘する一項があったが、この第十四項では、さらにすすんで俸入過厚の任官子孫が、一族にたいして援助を與えるように勧誘している。しかし、問題はそれに定式を設けて、それを義務づけることを避け、當人の道德的判断にまっとうとしている点である。特權的官僚がその一族にたいして行う援助は、當人の道德的な判断に委ねられていたわけである。宋代の

新興官僚がかかる一族聚居にたいしてとった態度は、仁井田氏既引の王栾「越州裴氏義門旌表」⁹⁶が傳えるところである。王栾は1008（眞宗・大中祥符四）年、十九世同居していたことで旌生された浙江會稽の裴氏が、その後二百三十六年間なお同居している事實に眼をみはり、その原因を次のように探りあてている。

裴氏力農。無士大夫者。所以能久聚而不散。苟有驟貴超顯之人。則有非族長所能令者。況貴賤殊塗。炎涼異趣。父兄雖守之。子孫亦將變之。義者將爲不義矣。裴氏雖無顯者。子孫世守其業。猶爲大族。勝於乍盛乍衰者多矣。

すなわち、ここでは士大夫が「驟貴超顯」して族長の統制に服さない者として、指摘されている。過厚な俸入によってにわかに顯貴な生活に達する士大夫的官僚こそが、宗族の結合の破壊者でもあったわけである。事實、范氏でも既に仲淹自身が義莊とは無關係に河南にあって家計を營んだ點が趙葵によって指摘されていたことを述べたが、その後、純仁は河南に、之柔が崑山に、惟丕が華亭縣の泗涇に移居したのであった。そして、かかる聚居から離反自立した新興の士大夫官僚が、その俸入のうちから宗族への援助を行うか否かは、當人の道德的判断——いわばその恣意性に委ねられていたのである。范仲淹の義田設置は、自から

の過厚な俸入にくらべて貧窮している同族への利得還流であったが、それはまた、新興の特權官僚が破壊した同族的結合への贖罪的產物であった、といえよう。しかし、それが同時に特權的官僚の恣意からでた產物でもあったことは、明代に兄弟、父子とつづけて進士に合格した後、かかる特權的官僚に任じ、いわば范氏にとって宋代における仲淹・純仁の時代を再現した、惟一・惟丕・允臨が義莊にたいてとった態度からうかがえよう。千畝の田を助入した允臨をも加えて、彼等が私家に築いた資産に比して、當時困窮の極にあったところの一族にたいする態度は、極めて冷淡なものであったといわねばならない。義莊にたいする冷淡さは、彼等の特權官僚に限ったわけでもなかった。乾隆年間に主計に任じた宏燦なる者の傳^⑤には、

歲丙子（1786・乾隆二十一年）、父歿。家業蕭然。…偕仲兄奉大母與母。移居對里之負郭。棄書。權子母計。家稍裕。…乾隆四十一年。適莊務大壞。逋負六千金。并誤條漕。族長及各房長欲延爲主計。公堅辭。敦請不已。公以義澤攸關。與主奉文世公（儀炳）出而任事。…然公私交迫。往往寢食不寧。…

と、金融業で産をなした宏燦が、借財に苦しむ義莊の主計就任を懇望されながら、なかなか承諾しなかった様子を述

べる。その私産をもって義莊の負債を肩代りせねばならない危惧があったからであろう。義莊經營からはなれて別個に蓄財したこれら特權官僚・金融資産家に共通する義莊への冷淡さは、私産利己主義とでもいふべきであろうか。

これにたいして、義田をとりまいて聚居する族孫は、明代の主奉・惟立の例にみるように、あるいは科擧の失敗者であり、清初の主奉・必英の例にみるように、あるいは陞進に意をえなかった非特權官僚であり、そして資産家たりえなかったその他族衆なのであった。（もっとも主奉に上述のような族孫を奉じた一因は、對官邊折衝を容易にするためであったことは、清初の布衣の主奉・安恭が官衙への折衝にいかん苦心したかをみれば明かであろう。）しかも、彼等として決して私産利己主義を否定するいわば宗族主義者の集團でなかったことは、冒頭に指摘した、彼等の義田私宥化の慾求が、不斷に義田を危機に陥れたことよって明かである。彼等もまた私産利己主義者の集團に他ならなかったのである。

これら私産利己主義の慾求にたがをかけて、義田の存續を可能にしたのは、官邊の保護と監視であったことは續述

を要しないであろう。宋代には再度にわたり、皇帝の勅旨によって、義莊の規矩が權威づけられた。元代においても、その既得權は追認された。明代においては、皇帝自らが義莊を保護した形迹はなく、むしろ沒官にみたように、義莊は冷遇された。かかる明代皇帝權力の性格は、また別個に検討されねばならないが、しかし、その時代にも、皇帝に代って監察御史陳智、工部侍郎周忱、巡撫方濂等があらわれて、沒官後の義田再興に挺入したのであった。ただ、仲淹の名聲を慕ってこの行爲に及んだ彼等の挺入れば、義莊の贈族的機能よりも、その祭祀的機能を助長したことは否めないが、ともかく彼等の挺入れで義莊は存続しえたのであった。かかる義莊にたいする官邊の保護と監視こそが、范氏義莊を稀有の例として存続せしめた主要な原因であつたのである。

すでに清水氏も述べておられるように、「官憲による族産保護の一般化したのは清代に入ってからで……大清律に族産の盜賣に關する規定が條例として加えられたのがそれである。」¹⁷⁵⁶（乾隆二十二年にとられたこの處置は、范氏義莊においては、「盜賣田産」の禁約として、これより

早く1565（明・宣宗・宣德元）年に蘇州府の公認を得て族内に榜示された處置であつた。これは康熙帝の聖諭十六條の「篤宗族。以昭雍睦。」を引伸した雍正帝の「置義田。以贍貧乏。」の方針に沿うものであつたことは明かである。

ここに至つて義田は、范氏義莊がまさにそのように變質していたように、貧窮族人を救済すべき社會保障制度の宗族版として獎勵されるようになったのである。それがいかなる程度まで貧族を救済しえたかは、あらためて検討せねばならないが、この大清律の族産保護によって、義田が一般に范氏義莊のごとく生命を長らえる保證をえたことは疑いない。清代の義田流行はそこに原因を見出すことができる。しかし、范氏義莊がまたそうであつたように、その經營の内實は、義田を私産化する少數族人の義田の名にかくれてする大土地所有に近かつたのではないだろうか。

清朝の族産保護は、むしろかかる義田の大土地所有の保護——それはまた家産不分割の公的な保護でもある——として結果したのではなかつたらうか。

複雑多様な義田を范氏義莊の一例をもつて律することはできないが、以上に述べたように、宗族的土地所有であ

る、というよりは「であるべし」とされた「義田に、そのまま宗族的結合の經濟的基盤を認めて、宗族的共同性、宗族的利己主義を求めることは、義田の美名に幻惑されることになりはしないであろうか。

註

- ① 田中幸一郎・義莊の研究（三田學會雜誌十一の十二・大正六年。のち同氏著『田中幸一郎史學論文集』所收。）
- ② 牧野巽・乾隆十一年重修范氏家乘に就いて（服部先生古稀祝賀記念論文集・昭和十一年。のち同氏著『近世中國宗族研究』所收。）なお范氏家乘には道光三十年續修本（東洋文庫藏）がある。以下前者を家乘、後者を道光家乘と略稱する。
- ③ 清水盛光著『中國族產制度攷』（昭和二十四年）
- ④ 仁井田陞・中國の同族又は村落の土地所有問題——宋代以後のいわゆる『共同體』——（東洋文化研究所紀要一〇・昭和三十一年。のち同研究所編『土地所有の史的研究』・同氏著『中國法制史研究・奴隸農奴法、家族村落法』所收）
- ⑤ 拙著・清代研究への覺書——明清社會經濟史の諸問題——東洋史研究二〇六一・昭和三十六年。
- ⑥ Denis Twitchett: THE FAN CLANS CHARITABLE ESTATE, 1050-1760. (CONFUCIANISM IN ACTION ed. by D.S. NIVSON and A.F. WRIGHT, 1959 所收)

- ⑦ ②⑦ 宣統庚戌（二年）重雕「范文正忠宣公全集」所收褒賢集卷三・家乘卷二二碑記各收
- ⑧ 范文正公全集所收褒賢集卷二・劉槃撰范氏義莊申嚴規式記。
- ⑨ 范文正公集卷一三・太子中舍致仕范府君墓誌銘
- ⑩ ⑬ ⑭ ⑮ 范文正公尺牘卷上・家書・中舍
- ⑪ 范文正公集補編卷一・奏議・「論職田不可罷」參照
- ⑫ 范文正公集卷九・書・「上呂相公書」參照
- ⑬ ⑭ ⑮ 范文正公全集・義莊規矩・家乘卷一五家規記。また多賀秋五郎氏「宗譜の研究・資料編」第三部資料參照
- ⑯ 同氏「史學論文集」二〇九頁引
- ⑰ 范文正公集卷八・書・「上資政晏侍郎書」
- ⑱ 梗稻については周藤吉之氏『宋代經濟史研究』「南宋に於ける稻の種類と品種の地域性」參照。
- ⑲ 范忠宣公文集卷一三・墓誌銘・范府君墓誌銘
- ⑳ 范文正公全集所收褒賢集卷一・富弼撰墓誌銘參照
- ㉑ 范忠宣公集卷一八所收
- ㉒ 同氏「近世中國宗族研究」一二五頁
- ㉓ 范文正公全集所收褒賢集卷三・家乘卷二二碑記各收
- ㉔ 純仁はまた河南の仲淹墓にも祭田八百畝を置いた。萬曆一年（1563）までに千二百九十七畝五分に増廣され、守墓孫生員范友諒によって維持されており（家乘卷一二・景行志・明・申時行參照）、乾隆三年（1738）當時なおその存續が確認されている（同上・國朝・尹會一參照）。
- ㉕ 范文正公全集所收褒賢集卷二・朝廷優崇「置功德寺」參照
- ㉖ 同氏「中國族產制度攷」六五頁

- 家乗卷一四・義澤記・義田總數
- 30 范文正公全集所收褒賢集卷三・樓鑰「復義宅記」附
- 31 范之柔は、字叔剛、乾道八年(1172)進士、通議大夫・禮部尚書を歴任、諡清憲。家乗卷五・賢裔傳「皇清修職郎毅亭公(儀在)傳」によれば「先是公(儀在)十五世祖清憲公之柔封開國子。食邑於崑。後裔遂家崑山爲崑山支。」とあり、之柔は崑山に家居しその後裔は崑山支をなした。
- 32 家乗卷五・賢裔傳「宋贈朝議大夫次卿公(良遂)傳附持家傳」
- 33 とすると畝當租額は一石。
- 34 范文正公全集所收褒賢集卷二・朝廷優崇、家乗卷一四・義澤記・省割文牒各參照
- 35 家乗卷一二・景行志・宋・潛説友、同卷一四・義澤記・省割文牒各參照
- 36 家乗卷四・宗子傳「元平江路道山書院山長竹趣公(邦瑞)傳」、同卷五・賢裔傳「元慶元路儒學教授竹所公(士貴)傳」各參照
- 37 家乗卷一四・義澤記・省割文牒參照。なお義莊の差役特免については清水氏前掲書七六―八頁を參照されたい。
- 38 家乗卷一四・義澤記・省割文牒「元世祖至元二十七年皇帝聖旨」
- 39 家乗卷四・宗子傳「明鄉飲賓子奇公(廷珍)傳」
- 40 家乗卷五・賢裔傳「明山東昌府萊邑縣玩雲公(子易)傳」
- 41 宋人軼事彙編卷八所引樵書
- 42 のち道光家乗卷一四・義宅記・義田總數でも原因が欠缺糧

- のみではなかったであろうと推定する。
- 43 家乗卷四・宗子傳「明徵士繼宗公(元紹)傳」同卷二一・誌銘錄「同吉公(元紹の子從異)墓誌銘」各參照
- 44 家乗卷二一・誌銘錄「定菴公(元理)墓誌銘」參照
- 45 前註および家乗卷一五・家規記「申明家規榜」參照
- 46 家乗卷一四・義澤記・省割文牒「周忱奏」
- 47 周忱はまた義莊に義莊戸を置いた。前註周忱奏には「於宣德七年(1432)撰造黃冊之時。選范氏子孫賢而有爲者一人。收戸冊內。明註新收義田若干。候至下次造冊。又選一人收戸。雖因義莊戸役得罪。不許典賣義田。亦不在本戸沒官之數。十年一次換戸。務要不失原額。」とある。この處置は元厚の秋糧違誤による義田沒官のごとき事態を防止するためにとられたと考えられる。以後、義莊は義莊戸という法人的戸下において收糧されたわけであるが、これ以前は例えば元厚戸といった族人の私的戸下に寄存されていたのであろう。
- 48 家乗卷一四・義澤記・省割文牒「范希賢呈」
- 49 家乗卷四・宗子傳「明處士梧庭公(啓父)傳」
- 50 家乗卷四・宗子傳「明孝廉八梧公(汝興)傳」
- 51 家乗卷二一・誌銘錄「北溪公(啓暉)墓誌銘」參照
- 52 家乗所收「萬曆五年家乗續修序」
- 53 Twichett 氏前掲書一二四―五頁參照
- 54 家乗卷二一・誌銘錄「南宋太僕卿中方公(惟一)墓誌銘」
- 55 家乗卷二一・誌銘錄「宗正公(子平)墓誌銘」參照

③② 宋人軼事彙編卷八所引樵書

③④ 家乘卷二一・誌銘錄「御醫中山公（惟立）墓誌銘」また同

卷四・宗子傳「明太醫院中山公傳」をも参照

③⑤ 家乘卷一〇・登進志・第十六世「惟丕」参照

③⑥ 家乘卷二一・誌銘錄「參議長白公（允臨）墓誌銘」

③⑧ 家乘卷二一・墓誌銘「孝廉牧之公（允謙）墓誌銘」参照

③⑩ 家乘卷四・宗子傳「明太學生質菴公（允觀）傳」

③⑪ 家乘卷四・宗子傳「明文學一虛公（彌章）傳」

③⑫ 家乘卷四・宗子傳「皇清奉祀生敬之公（安恭）傳」

③⑬ 文正書院は潛説友所置の祠堂を元の至正六年（1346）に改

めたもので、山長は置かず、主奉がそのまま祠事した（家

乘卷一二・景行志・元・吳秉彝参照）。

③⑭ 家乘卷二一・誌銘錄「文肅公（文程）墓誌銘」には『謹

按。范氏系出宋參知政事文正公仲淹。文正生尙書僕射忠宣

公純仁。忠宣之第五子正國。爲宋樞密院料理官。靖康之

變。扈元祐孟太后至江西。遂家臨川。三傳而至良儻。仕爲

迪功郎。徙饒之樂平。六傳至景申公岳。明洪武中。仕爲雲

夢縣丞。坐事。謫遼東瀋陽衛。遂爲瀋陽人。是爲公（文程）

始祖。四傳爲瀋溪公鏞。正德丁丑（1517）進士。累官兵部

尙書。以元直忤嚴分宜去。是爲公會祖。瀋溪公生瀋陽衛指

揮同知況。是爲公祖。況生楠。曰北垣公。娶於石華丈夫。

子二。公其仲也。』とある。

③⑮ 註②および家乘卷一二・景行志・國朝・慕天顏参照

③⑯ 家乘卷四・宗子傳「皇清徵仕郎翰林院檢討伏菴公（必英）

傳」参照

③⑰ 家乘卷一五・家規記「主奉必英呈憲續定規矩」、また多賀

秋五郎氏前掲書所收

③⑱ 家乘卷一五・家規記「主奉能濬續定規矩」、また多賀秋五

郎氏前掲書所收

③⑲ 公棧については家乘卷一七・廟祠考・義莊『本在義宅内。

後毀。改寅天平山。旋廢。乾隆丁巳（1737）。世孫安瑤。

于歲寒堂南隙地。興建倉廳三間。左右置棧房十二間。從房

一間。俱北向東向。廚房二間。西向。耳房三間。緣以周

垣。設承志・修業二門。每年收租發給於此。始復舊制。』

にある棧房であろう。

③⑳ また道光家乘卷一四・義澤記・義田總數参照。

㉑ 義莊歲記・康熙七年および康熙六十一年参照

㉒ 家乘卷一五・家規記「増定廣義莊規矩」参照。多賀秋五郎

氏前掲書所收。その特徴はこれまで缺如していた墓祭の費

用支出を第一目的におくところにあるが、その他脩祠・勸

學・周食・優老・恤寡・喪葬の各項は、いずれも必英・能

濬規矩を踏襲している。義莊歲記によるに歴代の監總・校

理には監簿房の族孫が殆んど任じられていないところから

すると、設置者の恩數で監簿房以外の族孫に厚給するもの

であったかもしれない。なお乾隆三一（1766）年には義莊

に併入されて從來の義田と一體に運営された（道光家乘・

義莊歲記同年参照）。

㉓ 明の太祖頒布の聖諭六言「孝順父母・尊敬長上・和睦鄉

里・教訓子孫・各安生理・毋作非爲」をうけた康熙帝の聖

諭十六條のうち「篤宗族以昭雍睦」を敷衍解釋したもの。

⑧5

清理後の范氏義田について。今、部圖に従って列擧された義田を乾隆一三年蘇州府志の郷都に従って郷・里の分布に配列しなおしたのが第1表である。ここで家乗が文正公原存義田（以下仲淹田と略稱）と稱するものが、果して仲淹創置の田であるかについて吟味を加えてみよう。まず仲淹田が1619（萬曆四十七）年の賦冊確認の千七十二畝五分七毫よりも増している理由については、家乗に『今除原額半糧田（千七十二畝五分七毫）外、餘田悉由明季暨本朝陸續歸入義莊者。大約因子孫將田兌換山地、以作墳墓。及催佃欠租。將田准折者居多。』と註記すれば、前回の確認以後の百六畝餘は、明末いごに増廣されたものが混入していることが明かである。

つぎに祖規では義田が贖還されたばあい、その元錢で直ちに別田を典買するように規定しており、この祖規は清代においても遵守されたとみえ、清理の僅か十五年前に加えられた廣義莊が原置の數に及ばない理由について、『按廣義莊原助田壹千貳畝捌分。緣內有未經杜絕之產。原主回贖。而近時田價甚昂。所存原值。不敷買補。故未及千畝之數。』と註記する。仁井田氏「中國法制史研究・土地法、取引法」第一部土地所有制第一章「中國法史における占有とその保護」によれば典賣者の收贖權は證書がはつきりしている限りは永久に有効であった（「一典千年活」という。とすれば仲淹田も規模こそ仲淹創置の千畝に近ikaiが、内實の田は典買に典買を重ねて宋代の原型をとどめていない可能性もある。今、試みに仲淹田、允臨田、彌敷田（廣義莊）

の畝數をもつて清理と同時に明かにされた各田の額租米數を除くと第2表の如き結果を得る。

仲淹田には既述のように明末いご増入の百六畝餘と「田地」と記載されて田と區別できない若干の地を含むから、この結果は概數であるが、しかし、仲淹田の畝當り租額は明末いごに増廣された他の二田と顯著な差異を示し、その數字八斗六升九合は宋代において義田の畝當り租額と推定した八斗の數に近似する。註⑧よりみれば租額は南宋末には一石となっている。それ以前の低額租額が既得權としてそのまま清代まで維持されていることは意外であるが、ここから仲淹田のうちの半糧田——その他の義田には清代に入つてこの特權は及ばなかった——は宋代の創置の原型に近いものと考えてよいであろう。

しかし、また家乗卷一四・義田總數では仲淹が義田を創置したのは「長吳二縣金鵝鄉等處」であつたと誌す。もしこれが事實であるとすれば、恐らく長洲縣金鵝鄉に最も多く置かれたのであらう。とすれば明代において長洲縣の田、とくに金鵝鄉の田は全て没官されているから、仲淹創置の田千畝がここまで残る可能性は薄いといわねばならぬ。總じて考えるに、家乗にいう仲淹原存義田とはむしろ吳縣至德鄉十一都にある天平山（家乗卷二一・誌銘錄「宣教郎元至公（良誠）墓誌銘」参照）に置いたと傳えられた純仁の田が、この清理の時まで維持されてきたものと考えられる。

義田の經營（租佃制）について。義田が創置の初めから、族

第1表 1746 (乾隆11) 年范氏義田分布表 [單位畝]

	鄉	里	所 在 (在縣)	仲 淹 田	允 臨 田	彌 敷 田	興 概 田	君 儼 田	
吳 縣	靈巖	晏公	西 南	56.180	1.000	28.950			86.130
	橫山	青墩	〃	96.590	105.278	8.500	9.100	7.000	210.368
	太平	全吳	〃	2.600	149.591				168.291
	太平	南胥	〃	43.357	11.848				55.205
	吳苑	勝化	〃		254.287				254.287
	至德	昌角	西	367.576		40.920		3.000	411.496
	胥臺	石城	〃	81.730		140.590			222.320
	南宮	新安	〃						
	長山	光福	〃						
	穹窿	阜安	〃	530.566		273.763			804.329
	遼禮	守義	洞庭東山		1.200				1.200
	震澤	閭城	〃						
	蔡仙	白門	〃						
	姑蘇	梅梁	〃西山						
	洞庭	玄宮	〃						
	長壽	習義	〃						
	西華	懷義							
	小 計			1178.599	523.204	492.723	9.100	10.000	2213.626
長 洲 縣	彭華	功成	西 北			124.693	29.495		154.188
	武邱	采雲	〃			71.324	21.973		93.297
	儒教	從化	北				7.914		7.914
	金鵝	金塔	〃						
元 和 縣	益地	厚生				252.550			252.550
	依仁	承訓							
	武邱	采雲	西 北						
	依仁	仁義	東						
元 和 縣	吳宮	寶座	〃			34.593			4.593
	習義	孝廉	〃		301.219				301.219
	陳公	金樓	東 南						
	蘇臺	貞寶	東 南						
元 和 縣	東下吳	顏安	東 南						196.837
	尹山	塔城	〃		196.837				
	益地	金生					30.748		30.748
	小 計				498.056	34.593	30.748		563.397
	總 計			1178.599	1021.260	975.883	99.230	10.000	3284.972

外人に租佃させていたものであることは既に指摘したが、佃戸と義田の關係を具體的に傳えてくれる記述はない。義莊歲記によるに、1740（乾隆五）年に「催佃・莊僕交收義租規條十則」なるものが規成されているが、残念ながら家乘に收録されていない。ここではこれまで本文に散見したところをあつめて、輪廓をうかがってみるにとどめる。

まず催佃であるが、義莊經營の決算を年終にあたり族人に報告することを義務づけた必英規矩第五項が、決算項目を列擧しているなかに「催佃欠若干」の一項があげられている。租米の納入は催佃の責任において行われたのであるが、また、本註既引の乾隆初年の清理にさいして、仲淹原置の義田數が、萬曆當時よりも増えている理由を説明する註記によれば、催佃は欠租を田をもって代納することがあったであり、これからすれば催佃は義田の租米徵收を包攬する一方、自からも私田を有する者であったことが明かである。ところでこの包攬制は創置のときからとられたものだったであらうか。

催租については、1083（北宋・神宗・熙寧六）年續定の規矩に

義莊勾當人。催租米。不足。隨所欠分數。剋除請受。至納米足日全給。

という規定があった。この義莊勾當人が當時の義莊管理責任者であった掌莊をいしかえたものであるとすれば、この規定は、催租する者についてなんらかの具體的な存在を意味していることにはならない。勾當人が掌莊のしたにあつ

て催租に従事する義莊關係者であるとすれば、それは欠租分の月給米の支給を剋除される者、すなわち、族人であることになる。もしこの解釋に従うのが正しいとすれば、それは次にべる族人の租米包攬の萌芽と考えられよう。兩者の解のうちいずれであるか、この一項からは決しえない。南宋に入つて之柔規矩が、族人が掌莊に賄賂をつかつて攬戸となり、耗米を多増することを要求する事例をあげ、これを義莊の利害に反する行爲として禁止していたことを本文で既述したが、義莊歲記1593（南宋・理宗・淳祐十二）年に

是歲。（掌莊）士廉以生放爲由。通同佃甲。犯規侵米。斥退。

とある。これによれば掌莊と佃甲とは租米に關して密接した關係をもっていたようで、佃甲が文字どおり佃戸のうちの長なる者の謂であれば、當時の租米徵收は、族人による包攬を排して、掌莊と佃甲の手許で處理されていた、とも推定されよう。

明代になって、周忱による義田清理が行われた當時、主率が城内に住み、提管と主計とが郷居したことを既述したが、のち必英續定規矩第一項で「凡義田租米……專令經收看管」することを權限にされた主計も清初には城居するようになつていた。すなわち1760（康熙九）年に主計に任じた可鎮なる者について、

檢討公（必英）舉（可鎮）爲主計。莊中錢穀出納。悉委之。郷居族姓以事入城者。亦多主其家貲治。

とある（家乗卷五賢裔傳「皇清封儒林郎棟生公傳」）。義莊の執事者たちが、城居するようになって、佃戸との距離が疎遠になるに従って、冒頭にのべたような催佃による包攬が必須のものとなってきたのであろう。必英續定規矩第九項「嚴催佃督責以清公賦」を参考に次に附しておこう。

贍族公田與民間私產不同。私產供一家之用。租缺尙可別那。若義田缺租。錢糧調給公用。何從那補。嗣後、收租例限冬至。結賬催完。其項便者。許主奉呈官。分限比追。有司力與准行。

つぎに莊僕であるが、必英續定規矩第一項で、莊僕は提管・典籍とともに租米・茶房山租の督催に當るべき者として規定され同第八項では祠宇・莊墓を看守すべき者とされていた。ところで家乗卷十四家規記「呈憲榜禁山塋廟寺規條」(1783・乾隆八年制定)の『禁佃丁盜伐樹木』の項には墳地山塋種植松楸。設有墳丁・山佃。分界看管。收息辨賦所產柴薪。以資養贍。以充工食。原藉其栽培看守。以防他人竊取。：

とあり、墳地・山塋を墳丁や山佃に栽培看守させ——本文既述のように山租を銀錢で納めさせ——ていたことを知るが、また、同規矩『禁催僕通同狗隱』の項には、墳丁・山佃奸良不一。設有催甲・莊僕。給以工食。著令經管稽查。倘有干犯禁規者。卽報明義莊處治。倘有仍前怠忽狗隱者。義莊照規責革。另行召充。

とある。催甲と莊僕の區別は嚴密でないが、右によるにいずれも墳丁・山佃の監督者で工食銀を給せられて義莊に雇

傭せられていた者であったことが明かである。しかも既に宋代において、この莊僕に當る者は、義莊に雇傭された者ではなかったかと疑われるものがある。すなわち、1108（哲宗・元符元）年、純仁・純禮・純粹等續定規矩十項のうちには

義莊人力・船・車・器用之類。諸位不得借用。

の一項を含んでおり、南宋の之柔續定規矩の天平功德寺を

（單位石＝單位石）
（單位畝＝單位畝）

第2表 1746（乾隆11）年范氏義田畝當租額表

	吳 縣	長 洲 縣	元 和 縣
仲淹田	$\frac{1042.990}{1178.599} = 0.885$	—	—
允臨田	$\frac{592.083}{523.204} = 1.132$	—	$\frac{531.865}{498.056} = 1.066$
彌勲田	$\frac{557.730}{492.723} = 1.132$	$\frac{500.200}{448.567} = 1.115$	$\frac{37.410}{33.593} = 1.114$

保護した一項に族人が「假借舟船。役使人僕。」していることを非難していた。この人力・人僕の具體例としては、之柔規矩にみえる、天平山の墳塋を看守する者としての墓客があげられるが、また、同規矩の別項では、族人の不法行爲として「主張不逞之徒充應脚力及墓客之類。」を事例としてあげる。これは本文既述のように族人が族外の信用できぬ人物を力に恃んで墓客・脚力に採用させ

ることを強制したのであろう、また、仲淹が仲温にあてた書簡の一つに

所言冗僕已去。惟船子留三兩人勾當。

という例がある（范文正忠宣公全集所收范文正公尺牘卷上・家書『中舍』）。船子は船頭であろう——義田の租米は船によって義倉に運ばれた——が、「餘剩の人僕を去らしめ、船子は二、三人を留める、」という人僕・船子は、さきの脚力・墓客とともに、頗る出入の容易な關係であつたことを思わせる。さらに義莊歲記⁹³（南宋・理宗・嘉定三）年には、

起蓋莊前碑亭挾屋二間。創立義宅門屋一間。并雇門子一人。看守門戶。

とあり、門子は雇傭する者であつたことが明かである。以上によるに、墓客・脚力・船子・門子など義莊の人力・人僕と呼ばれた者は、すでに早くから必要數に應じて義莊に雇傭されたものではなかつたか、と疑われるのである。ただ、これら人力・人僕・莊僕と呼ばれる者は以上にみてきたように、義田の租佃經營には直接關係にはしていなかつたようである。

96

97

98 道光家乘・卷一四・義澤記・義田細數「增置義田記」
道光家乘卷五・賢裔傳「皇清恩賜修職郎梧語公（宏遇）傳」

99

90

道光家乘卷一五・家規記「主奉來宗續定規矩」
同書三七頁に載する范義莊二萬畝の報告は、天野氏によれば疑わしいという。

91

清水氏前掲書六四頁

92

范文正公文集卷九・書「上呂相公書」

93

忠正德文集卷一〇

94

仁井田氏「支那身分法史」一一八頁註引、燕翼貽謀錄卷五所收

95

道光家乘卷五・賢裔傳「皇清例贈修職郎奉祀生玉堂公（宏燦）傳」

96

清水氏前掲書一八三―五頁參照